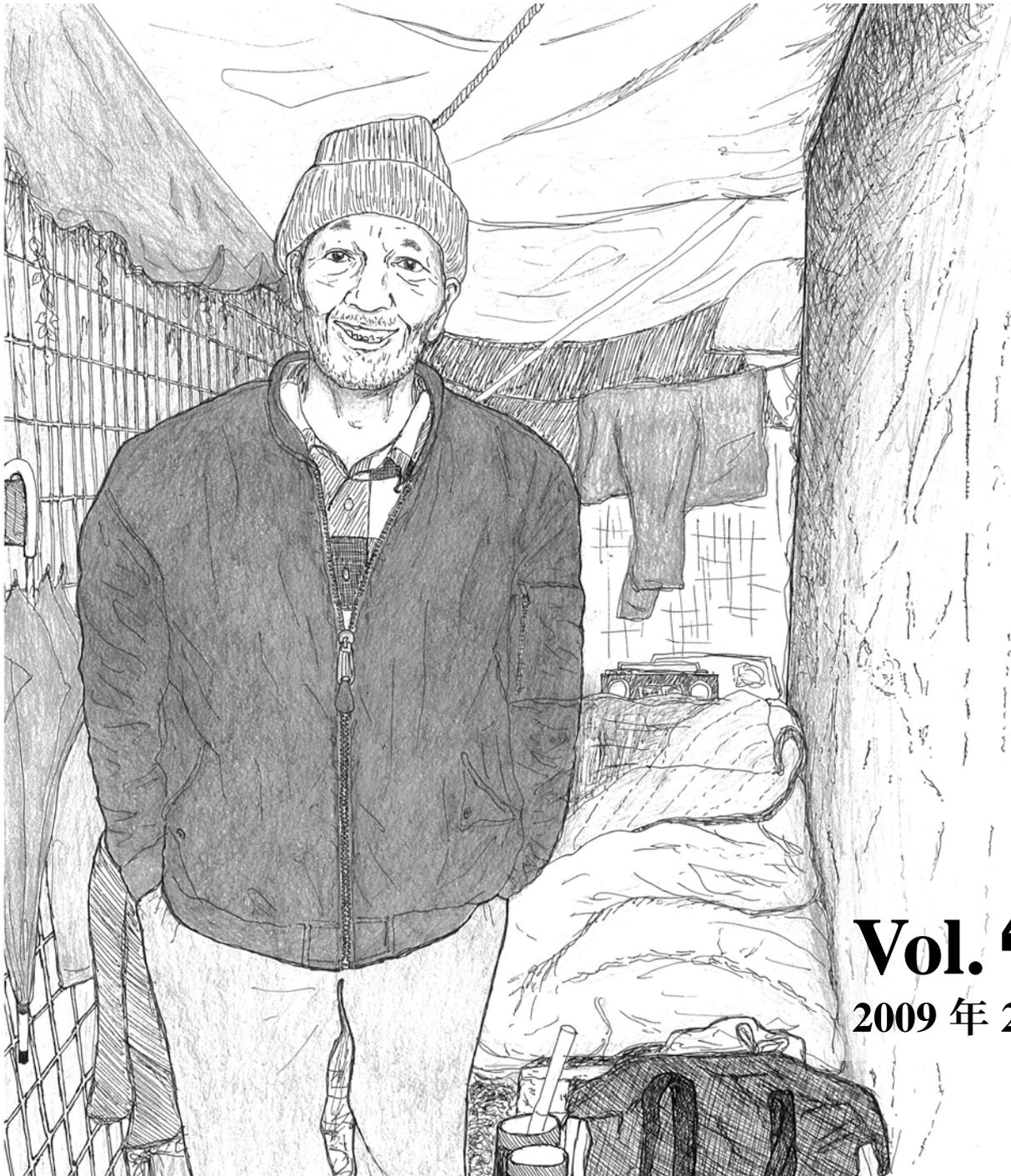


エンパワーするNGO



# 神戸YWCA 夜回り準備会 活動報告書



**Vol. 4**  
2009年2月

---

## 報告書 VOL.4 を出すにあたって

---

2005年秋にはじめて発行して以来、年1回のペースで作成してきた私たちの活動報告書も、今回で4冊目となりました。今年度も無事、みなさんに活動報告書をお届けすることができ、たいへんうれしく思います。

今回の報告書は、全4章から構成されています。第1章「夜回り準備会について」では、私たち「神戸YWCA夜回り準備会」の活動内容・なりたち・方針などをまとめています。基本的な内容は前回の報告書と同じものですが、私たちの報告書を初めて手に取っていただいた方には、最初に本章をお読みいただければ、私たちの活動を理解していただきやすくなると思います。

第2章「この1年を振り返って」では、2007年夏から2008年夏にかけての活動から見えてきたことを書き下ろしました。私たちの活動区域である神戸市灘区・東灘区では、この間、野宿者の減少がみられました。しかし、それが野宿を強いられている人の生活の改善には必ずしも結びついていないという実態に、私たちは活動の中で何度も直面しました。また、2007年6月から新たに始めた活動である「夜中回り」についても、この章で紹介しています。

第3章「活動で出会った人々からの聞き取り」では、昨年に引き続き、私たちが活動で出会った人からの聞き取りを行ないました。聞き取りにご協力いただいた3人はいずれも、現在野宿生活を送っている、あるいはかつて野宿生活を送っていた方です。震災で仕事を失った話、バスケットボールに熱中した若いころの話、いくつになっても仕事を続けたいという話——どれをとっても「ホームレス」という言葉ではひとくりにできない、その人その人の人生がありました。

最後の第4章では、活動に参加しているメンバーの感想を掲載しています。本会の活動や野宿のことから浮かび上がってくる問題は、多種多様な社会問題と密接に結びついています。そうした問題の広がりや反映するかのよう、活動に参加しているメンバーの思いにも、さまざまなものがあります。

活動報告書を作成するにあたっては、編集作業のあらゆる局面で、メンバーどうし、多くの議論を行ってきました。そこでの議論は、ただ単に報告書をよりよいものにすることだけでなく、私たちが自分たちの活動を振り返る上で、とても有益なものでした。この報告書を手に取られた皆さんからも、お読みになってのご感想やお気づきになったことをお聞かせいただければ、たいへんありがたく思います。

(中村 祥規)

---

# 目次

---

報告書 Vol.4 を出すにあたって .....	中村祥規	1
第1章 神戸YWCA夜回り準備会について.....	藤室玲治	3
》1. 夜回り準備会の目的と原則 》2. 夜回り準備会の活動 》3. 夜回り準備会の沿革		
第2章 この1年を振り返って(2007.7 - 2008.7) .....	鍋谷美子・村川奈津美	8
》はじめに 》1. 夜回りを通して 》2. 昼回り・病院訪問より 》3. 夜中のこと 》おわりに		
第3章 活動の中で出会った人々 .....		18
小河さん「震災・冤罪で野宿に追い込まれて」 .....	山本かえ子・五明泰作	19
梶原さん「野宿になっても完全に体を横たえて寝るのが恥ずかしかった」 .....	鍋谷美子・今西裕哉	26
松宮さん「働きたいなあ。体は動かさなあかん」 .....	藤室玲治・三輪真子・宮地陽介	31
第4章 参加者の感想 .....		35
岸 洋平 関優里香 田中水彩 中村祥規 鍋谷美子 野々村耀 藤室玲治 村川奈津美 山本かえ子		
付録 追い立てについてのピラ .....		45
ご協力ありがとうございました / 参加者募集 .....		46

---

## 【コラム目次】

① YWCA とは? .....	3	⑤ ケースワーカー (CW) とは? .....	13
② 「ホームレス」という呼び方について .....	7	⑥ 更生センター・更生援護相談所 .....	17
③ 一斉夜回り .....	9	⑦ 神戸市の低家賃施設 .....	17
④ 追い立てについて .....	11		

【表紙】ガードマンをしながら野宿しているKさん。仕事があったころは大工をしていて、鍋谷の住む鶴甲団地も建てたそう(なべたに画)

# 第1章 神戸YWCA夜回り準備会について

藤室 玲治

- 》1. 夜回り準備会の目的と原則
- 》2. 夜回り準備会の活動
- 》3. 夜回り準備会の沿革

●写真 夜回りでテントを訪問し、そこに住んでいる人の話を聞いている（2008年3月8日）



## 1. 夜回り準備会の目的と原則

### 会の目的

「神戸YWCA夜回り準備会」は、様々な理由で住むところを失い、公園や路上で生活せざるをえない人や、入院した後に帰る家がない人々が抱える様々な困難について話を聞き、私たちができることについて支援してる団体です。こうした活動の目的を次のように表現しています。

野宿したくない人が

野宿しなくてすむように

野宿せざるをえない人の

人権がそこなわれないように

### コラム① YWCAとは？

YWCAは、Young Women's Christian Associationの略で、日本語では「キリスト教女子青年会」という。100以上の国々にいる約2500万人の女性たちが力を合わせて、女性があらゆる機会において社会参加、自立することにより、平和な世界を実現するために働く、国際的な会員運動体である。イギリスで最初に創られ、日本では1905年に創立された。

現在、国内27の地域YWCAでは「憲法改悪を阻止し、第9条を世界平和の礎にする」「『核』廃絶と、自然エネルギー活用の運動を推進する」「子どもの権利を守る」「女性への暴力の問題に取り組む」を運動の課題として、さまざまなプログラムを行っている。

今、日本では「正規雇用」「非正規雇用」の二分化が進み、貧富の差が拡大しています。不況の中、多くの人が失業の恐怖を感じながら働いています。そして仕事を失い、家賃を払えなくなると、住むところを失ってしまいます。

以前は、建築や港湾労働などの日雇いの仕事で生計を立てていた男性が、ケガや病気によって、あるいは年を取って仕事からあぶれて野宿に追い込まれることが多かったのですが、今では、製造業での「派遣切り」など、より多様な職種の労働者が、失業によって野宿に追い込まれています。

こうして野宿せざるを得なくなった人は、医療からの排除や、追い立て・襲撃などの命に関わる困難を抱えることとなります。住所が無いために就職活動もままなりません。また生活保護をはじめとした社会保障を受けることも困難です。

私たちは、野宿している人々の人権がそこなわれないように、さらには、そもそも人が住むところを失わずにすむような社会の実現を目指し、活動しています。

### 活動上の原則

野宿している人の選択や尊厳を何よりも大切にしたいと思っています。人間同士の信頼関係で成り立っている活動ですので、野宿している人のプライバシーを侵したり、生活を損ねるような行為などがあ

れば、活動を遠慮してもら場合もあります。

### 会の参加者について

この団体は神戸YWCAの会員活動グループであり、神戸YWCAの本館や分室を拠点に活動しています。夜回り準備会の目的に賛同して、活動原則を守るならば、年代・性別・宗教などは一切問わず、どなたでも参加できます。活動に参加してみたいという方は是非、奥付の連絡先までご一報下さい。

なお、継続的に活動する方には兵庫県ボランティア共済への加入（年間 500 円、掛け捨て）をお願いします。

## 2. 夜回り準備会の活動

### 活動内容

夜回り準備会では神戸市の灘区・東灘区において「夜回り活動」と「病院訪問」を定期的実施しています。また、夜回りや病院訪問で受けた相談についてより踏み込んだ支援が必要なときには、不定期に「昼回り活動」を行っています。これには生活保護の申請同行や、医療機関での診察への同行などの活動が含まれています。毎月第 3 土曜日にはメンバーでミーティングを開催し、活動を振り返り、各種の行事を準備し、その他に会として必要な意思決定を行っています。

以下で、ごく簡単に「夜回り」「病院訪問」「昼回り」の概要のみを紹介します。

### 夜回り

夜回り活動は毎月 2 回、第 2 土曜日と第 4 土曜日の夜に実施しています。野宿している人の安否を確認し、神戸市の施設や民間の支援活動などについての情報を提供します。また、医療や生活保護を受けたいという相談や、あるいは追い立てについての相談を受けた場合は、本人の希望に沿って、こちらのできることに協力しています。

夜回りの日には 18 時に神戸YWCA 分室に集合して準備を行ない、19 時に 3~4 つのコースに分かれ

て出発、野宿している人のところを訪問します。その後 21 時には分室に戻り、各コースの様子を報告しあい、今後、昼回りなどでフォローすべき案件などを確認した後、22 時過ぎに解散します。

初めて参加される人には、17 時に来てもらい、野宿している人の問題や会の活動内容、活動上の注意などについてのガイダンスを受けてもらっています。

夜回り際には各グループが以下に掲げるものを持参して、野宿している人を訪問しています。

お茶セット（コーヒー、紅茶、緑茶、味噌汁、スープなど）／毛布／ビラ類（「神戸の冬を支える会」「カトリック社会活動神戸センター」からのビラも含む）／薬（風邪薬、胃薬、正露丸などの下痢止め）／乾パン／蚊取り線香（主に夏）／カイロ（主に冬）／石鹸／下着類・ジャンパー（要望があったときに昼回りで持参している）／おにぎり（第 4 週のみ）

夜回りでは物を「ほどこす」ことが目的ではなく、医療や生活保護、追い立てなどについて話を聞き、可能な支援につながるためのコミュニケーションを取ることを主な目的としています。ただ、話のきっかけとして、お茶などをすすめています。また厳しい野宿生活の中で必要になるであろうささやかな物品については寄付などで集めて配っています。

また、おにぎりを結んでくれるボランティアが第 4 週に活動していて、その時にはおにぎりを配っています。

2007 年 6 月からは、新たに「夜中回り」と称して深夜の時間帯にしか会えない人を訪問する活動を始めました。現在では毎月 1 回、第 4 土曜日の夜回り活動後に実施しています。深夜 0 時 30 分ごろから開始し、3 時ごろに終了します。

### 病院訪問

病院訪問は毎週木曜日（午後）に活動しています。夜回りで知り合った野宿していた人が入院している病院や、その他にも退院した後に帰る家がなく野宿生活になりかねない人のところを訪問しています。

「病院訪問」の目的は主に 2 つです。ひとつは、入院生活における困難を軽減し、治療が中断されな

いようにすること、2 つめは（本人が希望するなら）退院後に野宿生活に戻らないように手伝えることです。

### 昼回り

「昼回り」は「夜回り」「病院訪問」で知らされた問題（医療、住居確保から生活保護受給、追い立てと襲撃など）をフォローするために行なわれます。また夜回りでは気がつかない人を探したり、夜回りではゆっくり聞けなかったことを聞かせてもらったりすることも課題です。

## 3. 夜回り準備会の沿革

### 阪神・淡路大震災の救援活動から

ここでは神戸YWCA夜回り準備会の成り立ちから現在までのあゆみについて簡単に紹介します。

そもそも、神戸YWCAでの野宿している人への支援活動は、1995年1月17日に発災した阪神・淡路大震災の救援活動がきっかけで始まりました。

阪神・淡路を襲った最大震度7の都市直下型地震では死者6,434名という戦後未曾有の被害が発生しました。住宅被害も甚大で、186,175世帯が全壊、274,181世帯が半壊し、多くの人が一瞬にして住む家を失いました。当時、神戸市中央区上筒井にあった神戸YWCA本館も住むところを失った人の避難所となりました。

### テント村での活動

学校などの公的避難所は人であふれかえっていました。避難所に入れなかった人々は、倒壊した自宅、公園や空き地のテント、あるいは自動車の中で避難生活を送っていました。震災後1週間ほどから、そうした公的避難所の外にいる人々へ、神戸YWCA救援センターのボランティアが物資や情報を届けて回りました。

### 「ホームレス」との出会い

一ヶ月ほど経った頃、公園のテント村を訪問して

いたときに、ある住民から「向こうのテントの住人には物資を配らなくてよい」と言われたことがありました。その「向こうのテント」に暮らしている人は、震災前から住むところを失っていた人、いわゆる「ホームレス」でした。多くの被災者が野宿していた当時の神戸で、こうした差別があったのです。

この件について、救援センター内で議論を行いました。そこで「震災によって家を失った人であろうが、そうでない理由で家を失った人であろうが、区別する理由がない」ということで、その後も同じように対応することとなりました。

### 「神戸の冬を支える会」の結成

1995年初秋より、神戸市内で同じように震災救援活動をしていて、「罹災証明を持たずに」つまり震災以外の理由で家を失って野宿をしている人を支援しているいくつかの団体が集まり「神戸の冬を支える会」が結成され、神戸YWCA救援センターもその構成団体の一つとなりました。

この「支える会」は、年末に野宿をしている仲間たちで支えあって冬を乗り越えるために、市役所南の東遊園地にテントで「冬の家」を開設しました。ここに神戸YWCA救援センターからも毎日ボランティアを派遣しました。冬の家を建てて神戸市と交渉を重ねた結果、更生援護相談所の施設改善を勝ち取り、冬の家は撤収することとなりました。

### 夜回り活動の開始と展開

しかし、まだまだ寒い日が続いているため、支える会の呼びかけに答えて、1996年2月中の毎週土曜日、カトリック中山手救援本部や支える会の協力を得ながら、中央区（東部）と灘区で夜回りを始めました。これが私たちの「夜回り」活動のはじめになります。

1997年には、野宿している人の状況把握のため、厳冬期以外にも月1度くらいのペースで生田川から石屋川あたりの夜回りをしていました。1997年9月ごろには、青木フェリー乗り場の待合室で暮らしている人がいるという情報を得て、訪問の範囲を東

灘区まで広げました。

### 「夜回り準備会」の発足

1998年3月末には救援センターの活動は終了しました。4月より新たに神戸YWCA震災復興委員会が発足しました。この震災復興委員会では救援センターからいくつかの活動を引き継ぎましたが、その内のひとつが「夜回り活動」でした。

この活動を行うグループの名称については、話し合い考えたあげく「夜回り準備会（仮称）」となりました（現在では「（仮称）」はとっています）。どうもピッタリとくるネーミングが見つからなかったという事情によるものです。

このころから、毎月第2・第4土曜日の夜回りと第3土曜日のミーティングが恒例化しました。

1999年からは「病院訪問」や福祉事務所への同行などの「昼回り」の活動も始まり、現在にまで続く活動のスタイルが定まりました。

### 神戸大学学生震災救援隊との関係

2001年に神戸大学の学生と地域の人で開催するお祭り・灘チャレンジが灘区の都賀川公園で開催されると知り、そこで野宿の人を追い立てるようなことをしないで欲しいと、学生たちに申し入れに行きました。このことがきっかけとなり、私たちも野宿の問題をアピールするためにこの年の灘チャレンジから参加するようになり、現在まで毎年出店するようになりました。

またこのお祭りで神戸大学の学生震災救援隊との関係ができ、2003年2月には神戸大学が主催し学生震災救援隊が企画している神戸大学ボランティア講座の実習生を初めて受け入れ、現在にいたります。

2004年度、救援隊の学生たちが、灘チャレンジで「ホームレス」をテーマにした風刺劇の上演を企画し、その実施に「夜回り準備会」も協力しました。またこの年に、灘チャレンジ当日の会場で、敷金なしで物件を紹介しても良いという大家さんからの申し出も受けることができました。そのおかげで、住宅を希望する人への対応がスムーズに進むようになり

りました。

現在は、救援隊のメンバーの何人かが、夜回り準備会の活動に定期的に参加しています。また「夜中回り」の際の活動拠点も救援隊に提供してもらっています。

### 地域活動委員会の発足

神戸YWCAでは2002年4月から、いままでの震災復興委員会を解散して新たに地域活動委員会を立ち上げました。「夜回り準備会」もこの地域活動委員会に所属するグループということになりました。

### 2004年度「ホームレスをめぐる4つの話」

2004年度には「ホームレスをめぐる4つの話」と題した連続講座を開催しました。「神戸の冬を支える会」の青木茂幸さん、静岡大学の笹沼弘志さん、大阪の「長居公園仲間の会」の中桐康介さん、ルポライターの北村年子さんの4名にお話していただきました。その内容は講演録にしてまとめてあります。

### 2005年度以降の活動

2005年度には神戸大学学生震災救援隊が応援している「学童保育所どんぐりクラブ」で、学童保育所卒業生の中学・高校生相手に「野宿の問題」について話しました。また2005年度から、活動内容について取りまとめた「活動報告書」も作成するようになりました。

また2006年度と2007年度には神戸市の「シルバーカレッジ」にメンバーが講師として招かれて、野宿の問題について話をしています。

現在、情報を発信する機会も増え、新しく活動に参加してくれる人も多くいます。一方で訪問している野宿している人の数は減少傾向にあります。

しかしながら、襲撃や追い立てなど、私たちが取り組むべき課題は減っていません。今の私たちの活動と課題について、次の第2章をご参照下さい。

（ふじむろ れいじ）

## コラム② 「ホームレス」という呼び方について

夜回り準備会は、いわゆる「ホームレス」の問題に取り組んでいる団体といえる。しかし私たちはなるべくこの言葉を使わないようにしている。

かつて、公園や路上で生活している人は「浮浪者」と呼ばれていた。例えば 1983 年に横浜で、十数人の中学生が面白がって、山下公園他で寝ている 3 人の日雇労働者を殺し、20 人ほどに怪我をさせた事件があり、このことを当時の新聞は「横浜浮浪者連続殺傷事件」という大見出しで報じていた。これに対して日雇労働者の組合は、自分達は仕事が途切れて収入がなくなると、宿泊料を払えなくなって野宿するしかない、その時に「浮浪者」として扱われるのは差別的だと批判した。「浮浪者」ではなく、失業した労働者なのだ、と主張したのである。

日雇労働者の平均年齢が高くなり、働けない（病気・障害・高齢）者が増えるとともに、全国的に支援運動が増えてきた。その中で、自分達の運動をどう呼ぶか、言いかえると野宿している人をなんと呼ぶか戸惑いがあった。幾つかの例をあげると、「野宿労働者の人権を守る……の会」「野宿者人権資料センター」「……野宿生活者の……を守る会」「……野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議」「日雇労働者の人権と労働を考える会」等々、「浮浪者」ではない呼び名を模索して来たように思われる。「野宿者」「野宿労働者」「野宿生活者」等の表現はこうした苦心の表れである。

マスコミも「浮浪者」の代わりに様々な呼び方を模索してきたが、近年では「ホームレス」と言うカタカナ語が使用されることが多い。この言葉は「浮浪者」よりはスマートに聞こえるので使われるようになったのだろう。しかし、意識の中では「浮浪者」の言い換えに過ぎないのではないだろうか。「ホームレス」には「どこもなく怪しい、普通でない」「不審者」「ルンペン」という語感がつきまとう。

カタカナの「ホームレス」は、もちろん英語の "the homeless" から来ている。しかし英語の用法であれば、災害や戦災の被災者で家を失い、避難所や知人宅、難民キャンプに身を寄せている人のことも "homeless people" と呼ぶ。しかし日本のマスコミが災害で家を失

った被災者のことを「ホームレス」と報道することはない。また阪神・淡路大震災のときには、被災して家を失った人自身が、公園で隣にテントを張っている人のことを「あっちに住んでいるのは『ホームレス』だから支援せんでええ」と差別的に表現したこともある。

こうした例から分かるようにカタカナ語の「ホームレス」には単に今は住む家がない人を表現するという以上の、かつての「浮浪者」という言葉に通じる差別的な語感がただよっている。だから私たちは「ホームレス」という言葉を避けている。

とはいえ「野宿者」や「野宿している人」という表現も難しい。「野宿者」と言うと、その人の人格全体が「野宿」と言う色に染まって見えてしまう。確かに、野宿している人なのであるが、その人が同時に日雇労働や都市雑業に従事する労働者であること、様々な工夫とやりくりをして日々を送る生活者であること、権利の主体であり社会を構成する市民であるということが見えにくくなってしまわないかと思う。とはいえ、現状では他に良い表現も見当たらないので「野宿している人」という言葉を使っている。

また、法律・行政用語としての「ホームレス」という言葉にも注意しなければいけない。2002 年 8 月 7 日「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」が施行された。ここに日本の法令上はじめて「ホームレス」という言葉が登場し、次のように定義された。

「この法律において『ホームレス』とは、都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者をいう」。ここで「故なく」というのは列挙されている「施設」を管理する側にとって「故なく」ということだ。寝ている側の事情として「故なく」して「ホームレス」である人に私たちは出会ったことがない。

さらに厚労省は、この定義に基づいて、いわゆる「ネットカフェ難民」などは「ホームレス」ではないとして、かわりに「住居喪失不安定就労者」と名付けている。「住居喪失」と言っているのに「ホームレス」ではないと言い張っている訳だ。

こうした定義に納得できない私たちとしては、安易に「ホームレス」という言葉を使うことはできない。

## 第2章 この1年間を振り返って (2007.7-2008.7)



### はじめに

また一年、淡々と夜回りを続けている間にも、私たちの訪問する先ではいろいろな変化があります。その全てとは言えませんが、私たちの夜回り範囲で見えてきたこと、そこから読み取れることを、書いていきたいと思えます。

毎年変わらず行っている一斉夜回り (9p【コラム③】参照)の結果を見ると、昨年と比べ、やはり出会う人は減少傾向にあります。2007年の一斉夜回り時、出会った人は20人でした。そして2008年7月、出会った人は14人。一斉夜回りの結果として報告したのは、のちに述べる夜中回りで出会う4人も足した18人です。数でみると昨年度と比べると、微減といった感じです。それでもあらたに野宿になったという人には出会い続けています(ただ、神戸市全体の結果を見ると、人数は数年ぶりに増加に転じています)。その中で、私たちが気になったのは、数の変化より、野宿している状態の質の変化でした。前号の報告でも書きましたが、人数は減っても、より不安定な形で生活している人が増えてるのではないかと、という実感がさらに強められたように感じます。

この1年の間に、私たちは普段の夜回りとは別に、時間帯や場所を変えて夜中に回る訪問活動(以下、「夜中回り」)を試みました。すると、最近野宿になり、どうしていいか途方に暮れていた、という

鍋谷 美子  
村川 奈津美

》はじめに 》1. 夜回りを通して

》2. 昼回り・病院訪問より

》3. 夜中のこと 》おわりに

●写真 Oさん(10p参照)が住んでいたベンチ。Oさんが去った後、手すりが付けられた(2008年3月8日)

人たちにほとんど毎回出会うのです。そういう人たちには、荷物になるし置いておくところもないということで、毛布さえ渡せないことも多いです。つねに移動を強いられる生活のため、物をどこかに置いておくということが困難なのです。

### 2. 夜回りを通して

#### 一斉夜回り結果から

まず、一斉夜回りの結果を見比べてみたいと思います。2007年7月の一斉夜回り時に出会ったのは20人。この中で、2008年の一斉夜回り時にも継続して会ったのは9人。居宅に移っていたのが2人。行方不明が7人。そのとき拘置所にいた人が1人。亡くなった人が1人でした(【表1】参照)。

また、一斉夜回りと同時期に、夜中回りで出会った人の数も数えてみたいと思います。2007年6月末に初めて行われた夜中回りですが、それから2008年7月までに出会った人は14人(名前の分からない人や、1度きりの人は含みません)。その中で、居宅に移った人が2人。更生センターで保護を受けた人が1人。継続して出会っている人が6人。行方不明が5人です(【表2】参照)。

どちらも、居宅や更生センターに移った人は、一人をのぞいて私たちが同行し、生活保護を申請しました。そして、その人たちは例外なく「最近野宿を

始めたばかり」であったり、テントを持たず、仕事もままならない、という人たちばかりでした。

【表1】この1年間に会った人の変化（夜回り）  
(2007.7-2008.7)

理由	人数	備考
継続	9人	
居宅生活	2人	うち、生活保護1人／年金1人
行方不明	7人	他の場所で再野宿など
拘置所	1人	
死亡	1人	テントの中で死亡
計	20人	

【表2】この1年間に会った人の変化（夜中回り）  
(2007.7-2008.7)

理由	人数	備考
継続	6人	
居宅生活	1人	生活保護
行方不明	5人	他の場所で再野宿／仕事場に居候など
施設	1人	更生センターに入所
計	14人	

※表には、夜回り・夜中回りで会ったものの、すぐにいなくなった人などは含んでいない。

#### 行方不明の人

いなくなった人たちは、去年は実は、どこか別の場所で野宿しているという場合や、居候している、ということが分かっていたケースがほとんどでした。なので、実際に居場所の分からなくなった人というのはいなかったに等しいのです。しかし、今年出会っていた人たちでいなくなった人は、夜回りと夜中回りを合わせて12人。その中で、所在を他の人からでも聞いているのは2人ほど。あとは、全くどこへ行ったのかも分からないという状態です。このことが何を意味しているか。

これまで、野宿している人が減っていると言ってきましたが、その多くはテント生活をし、長い間夜回りで関わってきた人ばかりでした。しかし、最近はそのような人たちはほとんど見られず、公園の東屋にしばらく（テントを張らずに）暮らし、いつの間にかいなくなる、というように、定住はしない形で暮らしている人がほとんどです。行方不明になった人だけを見ても、周りや夜回りとの関係をそれほ

どつくりないままに、いなくなるというケースが多く見られました。私たちが関係をつくりきれていないということもありますが、その中にはアルミ缶集めなどの仕事を持っていない人も多く見られました。

野宿している人は、仕事をする中で、他の人と繋がっていることがよくあります。遠くに住んでいても、アルミ缶や荒ゴミ集めをする中で、ゴミの収集場に出会うことで、情報を交換していたり、人間関係をつくっているようなことがままあります。近くで野宿している人との関係はそんなにないが、アルミ缶集めで知り合った友達はある、ということも少

#### コラム③ 一斉夜回り

神戸市内でどれだけの人野宿しているのか。神戸市は毎年調査していて、野宿者対策の根拠にしているが、その結果は野宿者支援をしている側の実感を下回る。そこで独自の調査が必要だと考え、1999年から毎年1度、市内の諸支援団体（神戸YWCAは灘区・東灘区を担当）が、7月はじめに一定の日時を決めて一斉に野宿している人の数を調査している（取りまとめ「神戸の冬を支える会」）。

今年までの調査集計結果は以下の通り。

年	男性	女性	不明	合計	前年比
2008年	163	5	0	168	107.01%
2007年	155	2	0	157	73.71%
2006年	208	4	1	213	66.98%
2005年	305	9	4	318	81.54%
2004年	370	18	2	390	88.44%
2003年	419	14	8	441	90.37%
2002年	470	12	6	488	111.42%
2001年	416	8	14	438	86.56%
2000年	464	13	29	506	101.40%
1999年	472	14	13	499	—

ここ数年、神戸市内に関しては、減少の傾向がみられていたが、2008年、6年ぶりにわずかながら増加に転じた。私たちの担当する灘区・東灘区では2007年の21人から2008年は18人となり、微減である。

同時に2007年7月から2008年7月にかけての1年間で「神戸の冬を支える会」の生活相談により117名が野宿から脱却している（生活保護114名・年金受給1名、帰郷2名）。

なくありません。なので、そういう仕事を持っていないということは、その人の人間関係にも大きく影響します。仕事とは、生活していく糧を生み出すだけでなく、その人が属する関係や社会に繋がっていくための大きな要素なのだと分かります。

気づけば、少なくとも私たちの知る限り、ここ数年あらたにテントが張られるということはないように思います。そして後で書きますが、きちんとした選択肢も示されることなく追い立てられることも、見られるようになっていきます。

### ○さんのこと

灘区内の公園の東屋の下のベンチを寝床としていて、私たちが3年近く訪問し続けていた○さんという方が、ある日忽然と姿を消してしまいました。私たちが最後に会ったのは2007年8月25日の夜回り。その次の夜回りである9月8日には荷物がなくなっていました。その後10月になっても○さんがいない日が続き、他の野宿している人からは「あそこは撤去されたのではないか」という噂も耳にしました。そこで、10月25日に、「追い立てなどはなかったか」と神戸市の広聴課へ問い合わせました。その回答を待っている間、10月27日の夜回りで訪問した際に、○さんのいたベンチのペンキが塗り替えられ、真ん中に仕切りがつけられていました。これを見て、神戸市による追い立てがあったのではないかと考え、11月1日に直接公園管理課へ行きました。

その時に対応した、管理係長の話によると、少年野球の父兄や近所の人から、以前から東部建設事務所のほうへ苦情があったそうで、それを受けて8月の末に、公園管理課の巡回の職員が訪問したとのこと。ただしその際、「追い立ては違法であり行なってはいけない」とのことでした。また、ベンチの塗り替えと仕切りの取り付けの件は公園管理課では把握していない、東部建設事務所が行ったのではないかと、ということでした。

そこで翌週11月8日、東部建設事務所へベンチの工事の根拠を聞きに行きました。その時に対応した、公園緑地担当主幹の話によると、訪問した公園管理

課の巡回の職員を中心に、公園管理者の立場から、「ひとりで東屋を使うのは困る」「もっとちゃんとしたところへ」など、何度か話をしに行ったそうです。また、隣接する市営住宅からも「公園にあんなのはよくないのではないか」「行政のほうで出て行かせて」「そういう人がいるのが不安」といった苦情があったそうで、それに対しては「人権の問題があるので追い出すのは難しい」と回答をしたそうです。

ベンチの塗り替えと仕切りの件に関しては、塗り替えは老朽化のため、仕切りは、「公園施設の適正利用を促進するため」とのことでした。「適正利用」というとわかりにくいのですが、「ベンチは寝るものではなく、本来座るものである」という考えに基づいているそうです。つまり「寝れないように」仕切りをつけたということです。そして今回の仕切りに関しては、やはり住民からの苦情で設置したとのことでした。

これだけではわからないこともあったので、数ヵ月後に実際に公園に行った公園管理課の巡回の職員を訪ねることにしました。彼の話によると、9月の初め頃、○さんが公園近くの駅の周りをうろうろしていたとの自治会の方からの苦情が東部建設へまわり、訪問ということになったそう。ただ、これが初訪問ではなく、それまでにも何度か訪問していたそうです。

住民の中には嫌がっているひともいるんだから、更生センターに行くのなら行ったらどうかと促すうちに、大阪にご家族のひとりがいるということがわかり、フルネームと連絡先を言ったら、電話持っていないやろうから連絡したろ、という話の流れになり、すると、それならば出ていく、ということになったそうです。

○さんの立ち退きの日はこの巡回の職員と東部建設事務所の公園緑地担当主幹とで見送ったそうです。福祉部局のひともいなければ、私たちにも何の連絡もなしでした。前任の巡回の職員は、公園に住んでいるひとについてよく私たちに相談してくれていました。もし私たちに連絡があれば、○さんの話を

もっとよく聞いたうえで、これからのことを一緒に考えられたかもしれません。神戸市は、私たち民間の団体とも連携すると自立支援計画に明記しているのに、それはおろか、福祉部局とすら連携できていないのです。

しかし、Oさんから直接私たちへ連絡がなかったことは悔やまれます。追い立てに遭った時など、困った時に相談してもらえるような関係が築けていなかったということ、反省するとともに、そのような関係を築くことの難しさを、今回改めて痛感しました。

今回、Oさんはこの公園を去ることになってしまいましたが、また別の公園に行くことになったら、結局のところ状況は何も変わりませんし、むしろ、去ることになった本人にとっては、状況が悪くなることが多いです。だから、私たちはあらゆる追い立てに反対しています。しかし、やむをえず神戸市が移動を求める場合、野宿している人の人権を守るために、どういう手続きを取らねばならないかを、私たちは震災の後に神戸市と約束したのですが（右【コラム④】参照）、その約束が守られていなかったと言わざるをえません。例えば今回、東部建設事務所から福祉事務所へも更生センターへも連絡はありませんでした。今後も、定期的に神戸市に対して、約束について確認していく必要があるということを痛感しました。

また、今回、話し合いの過程で、たびたび「住民の苦情」がその理由としてあげられました。しかしこちらが、「その苦情は記録しているのか」と尋ねると、はっきりとした返事はなく、苦情の内容もあいまいでした。そんなあいまいな根拠で、野宿している人の人権に関わるような追い立てが行われるのです。さらに、もし苦情の内容が「いるだけで怖い」というようなものだったら、それは野宿している人に対するいわれない差別なので、それこそ「人権」の立場から、ひとが野宿に至る背景なども含め、苦情を言って来たひとに話をすべきでしょう。

Oさんは今、どこでどうしているのでしょうか？

#### コラム④ 追い立てについて

阪神・淡路大震災以来、神戸市が野宿している人の追い立てや所有物を撤去することに対して、野宿している人と支援するグループ（カトリックの現地救援本部やNPO法人になる前の「神戸の冬を支える会」など）は抗議を行い、何度も神戸市と話し合いをしてきた。以下を文書で申し入れた、文書の回答はなく、話し合いの中で了解があった。

1. 一方的に追い出したり、生活に必要な物資を撤去したりしない。基本的に追い立てはしない。
2. 野宿している者の人権、生きる権利、人間の尊厳を大切にし、差別をしない。
3. やむを得ず、移動を求める必要がある場合は、以下の手続きを取ること。

ア 移動を求める理由を本人に説明すること。

イ これは、追い出しではなく、移動を求めることから、次に住むところを用意し、本人が理解し納得した上で、本人が移動すること。（本人が希望すれば手伝ってもよい）

ウ 生活用品は本人が納得しなければ、撤去や廃棄はできない。

エ 移動をする必要性を本人が納得できるように、少なくとも1ヶ月以上前までに（市は2週間前と言っている）、文書と口頭で、移動してほしいことを伝え、説明すること。

オ 文書には次の内容を含めること。（1）移動を求める理由、（2）移動先、（3）移動の期限、（4）文書を張った日付、（5）部署と責任者と担当者名、（6）連絡先

カ 保健福祉局などと連携して、本人の状態に応じて、移動先や医療、生活保護や仕事などについてきめ細かく対応できる体制を整えて、相談に応じること。

私たち夜回り準備会でも、上の内容をピラにして、野宿している人に配布している。移動を要請しに来た市職員に見せるためのピラもある。

しかし現実には、その約束が守られていないと感じることが多い。特に最近では、公園管理などの現場の職員が、こうした約束の内容を把握していないこともあり、何か起こるたびに、申し入れを行っていきかかると感じている。

元気でいてくれることを祈るばかりです。

### 亡くなった人

夜回りで出会っていた人で、1人がこの間に亡くなりました。その人、Fさんは、2007年8月に仕事仲間と海に遊びに行き、そこで溺れて亡くなったということでした。Fさんは、人づてでつながりのある仕事をずっとしており、自分は食っていけるから、回らなくていい、といつもは訪問していませんでした。必要があるとき、例えば労災に遭い困っている友人の相談を私たちに持ちかけてきたり、という付き合いでした。急な死で、周りに住んでいた人たちも、私たちも言葉もなかったのですが、住んでいた車の付近に花を手向けました。

## 2. 昼回り・病院訪問より

毎週木曜の病院訪問でも一人、亡くなった人がいます。Nさんです。Nさんと初めて会ったのは2007年10月25日の病院訪問でした。更生センターから新しく入院した人がいるという情報で訪問したのです。ガンが分かったのは11月8日。肝臓ガンで、もうあと1年もたないと言われていました。それから翌年2月まで、Nさんへの訪問は続きます。

### 生活保護の締め付け——Nさん

Nさんは兵庫区に住んでいましたが、家賃を払えなくなり、1年ほど野宿。ときには手配師の手伝いで飯場へ人を送って行ったりなどし、3000円ほどもらったりしていたそうです。肝臓は昔から悪く、4、5年前に医者にかかりたくて福祉事務所に相談したが、医療費だけを生活保護で出すことはできないと言われて断念したということでした。今回は他の病気で歩けなくなり、ようやく入院という形になりました。そこで、ガンを患っていることが発覚したのです。一度は自分で福祉事務所に相談に行っているNさんだけに、もう少し早く医療につながれなかったのかとも悔しく思います。結局兵庫区からケースワーカー（以後、CWと略す。13p【コラム⑤】参

照）がついたのですが、そのCWとのやりとりが、しんどいものでした。

聞くと、初めCWは、「退院したら働きなさい」「家の世話なんかできません」と言っていたとのこと。それでこちらからCWに電話をし、退院したら保護継続で敷金を出してアパートにも住めるはずだ、理由もないのにできないと言うのではなく、きちんと対応するように言います。これでCWも敷金を出せないとは言わなくなりましたが、残念ながら、本人のみの対応だと、しばしば生活保護で受けられる権利をきちんと教えられないどころか、妨げられることがあります。そうならないための病院訪問でもあるのですが、本当は福祉事務所に本人が相談に行った段階で、きちんと対応されていれば、私たちの活動は必要ないのです。

その後、通院でもいいと言われたNさんは居宅のアパートを探すのですが、体調面の不安もあり、なかなか進みません。その間今度はCWがNさんの治療と生活に必要なおむつ代を出さないとやってきたとのこと。おむつ代はきちんと生活保護費の中に医療費とは別項目であるから、と話しCWに言うように伝えますが、さらに何度か出せる出せないのやりとりののち、やっとのことでおむつ代が出ました。

生活保護の中には、いくつかの種類の扶助があります。その中には生活扶助（生活費）、住宅扶助（家賃等）、医療扶助（診療費、薬代等）などがあります。そのひとつに一時扶助というのがあり、その「被服費」の中に「紙おむつ等」、という項目があるのです。

はじめNさんは、おむつにお金がかかるのだが、生活保護で出ないのかと言っていました。それをCWがつっぱねたので、私たちに相談があり「出るはずだ」と伝えたのですが、再度出ないと言われたとのこと。聞くと、Nさんが「おむつ代は医療費から出るはずだ」という言い方をしたので、CWは、おむつ代が生活保護のしくみの中に医療費とは別枠であることの説明もせず、出ない、と言ったのでした。そしてCWが伝えたのはそれだけ。保護のことをきちんと伝え説明するのが本来CWの役割である

はずです。この対応には私たちもあきれ、怒るしかありませんでした。もう一度「“おむつ代”から出してくれ」と言うように N さんに伝え、ようやく出たという有様でした。

その後もいろいろあり、だいぶ状態が悪くなってからようやくアパートを借りることができた N さん。しかしそのアパートの敷金についてもさらに、CW はしぶっていました。敷金を、なんとか分割払いにできないかと言うのです。そんな話は初めて聞きました。N さんは余命も長くない。そのことを分かっている、少しでも支給額を減らしたいのではないかと思います。私たちは、その CW の態度に憤りを通り越して、かなしくなりました。かなり痩せ、自分で歩くのも難しくなりアパートに移ってのち、ほとんど食べるのもままならなくなって、動くこともしんどそうだった N さん。家を訪問しても、ほとんどベッドの上から動けません。徐々に自力で動けなくなり、最後は救急搬送で病院に戻って、「もうだめかもしれない」と言い、しばらくして息を引き取ったそうです。出会ってから 3 ヶ月ほど、アパートに移ってからは半月ほどでした。

N さんの場合、いくつものポイントできちんと福祉が対応していれば、と思うことがありました。医療の相談に福祉事務所に訪れていた 4、5 年前や、今回の CW の対応。もう少し、N さんの意向が汲めるようなかたちで動けていたら。せめて生活保護法に則った当たり前の対応がされていたら。CW の心ない言葉の数々で、治療のしんどさにも加えて、N さんは疲弊していたように思います。

ただ少し、N さんのことで良かったんじゃないかなと思えたのは、入院中の周りの人たちが、何くれとなく世話を焼いていたことでしょうか。同じく退院しても帰る家がなかったり、すでに保護を受けて居宅で暮らしている何人かの人たちが、N さんに頼まれ、注文が多いと文句を言いながらも買い物をしたり、何かと手伝っていました。そういった不思議な横のつながりのようなものも垣間見た気がします。それは、一人で暮らしで身寄りのない人が入院したときの大変さ、また退院してからも生活を送ること

の大変さも表してはいるのですが。

葬儀はごく簡単に行われました。生活保護での葬儀というのは、葬儀社によっても変わりますが質素なもので、こちらが言わない限り花なども用意してくれないことも多いです。N さんのときも、枯れかけたシキミが 2 本あるのみでした。それでも、お坊さんの読経があるだけ、ましだということでした。

#### 敷金は出せません?—Uさん

敷金の話では、もう 1 件、退院後敷金を支給しない、と言われることがありました。同じく病院訪問で出会った U さんのケースです。現在、神戸市では入院し生活保護を受けると、退院時に敷金支給され、そのまま保護継続でアパートなどに移って居宅生活、が一応はできるようになっています。これも、以前は退院したら生活保護を打ち切られ、また野宿に逆

#### コラム⑤ ケースワーカー (CW) とは?

ケースワーカー (CW) という言葉はいろいろな現場で使われているが、ここでは福祉、とくに生活保護の CW について書く。生活保護業務に従事する人の中で、直接、保護を受ける世帯の処遇に当たる人がそう呼ばれるようだ。具体的には、生活保護を受けている人の、生活全般の相談も受け、サポートもする。

保護を申請したときから担当 CW が決まり、保護する要件を満たしているか調査し、居宅での保護の場合は居住確認 (住んでいるアパートなどを訪問して確認) をするところから関わりがスタートする。医師が働けると判断すると就労するよう要請し、医療を受けたり教育を受けたりする人への支援など、そのひとり一人に合ったきめ細かなサポートをするのが CW の役割だ。

しかし残念ながら、そういった生活全てに関わるということが、なかなか行われていないように思う。国が福祉を締め付ける中で、CW 一人に対する生活保護受給者の数はどんどん増えており、きめ細かく対応することが難しくなっている。また、福祉について十分な理解のない人が CW になり、間違った対応をすることもまれではない。

時間のない中で、精一杯対応する CW もいるが、厳しすぎる就労指導などで不信任や不安を煽り、保護を受けている人が追い詰められているケースが増えていると感じる。

戻りという状態だったのを、病院訪問を続けていく中で抗議していった結果です。にもかかわらず、Nさんの件といい、簡単に「敷金は出せない」という話が再び出るようになってきていると感じます。

Uさんは糖尿と椎間板ヘルニアで入院してから1ヶ月余りようやく保護決定がされました。さて退院したときはアパートに入りたい、という話をCWにすると、「敷金は出せない、更生センターに入ってくれ」と言われたとのこと。メンバーが福祉事務所に同行し、係長も交えて話をするも、再検討する、という返事でした。その後2週間ほどして、CWがわざわざ病院にやってきて再度本人に出せないと言ってきました。それでもUさんは、「更生センターに行くつもりはない。糖尿の食事もいろいろと制限があるのに、施設でやってくれるのか。自分できちんと生活していきたい」と話したと言います。実際、断られる理由が分からず、65歳になっていないからぐらいしか思いつかないということでした（それすらも理由にはならないのですが）。

その後、経験のあるメンバーが今度は灘区の福祉事務所ではなく、神戸市の保健福祉局保護課に問い合わせ、こういう事例で敷金支給を断られているのだが、どうしたらいいかと聞きました。不服審査請求をすることも考えている、とも。ただできるだけそうはしたくない、という言い方で聞いてみました。保護課からは、とにかく理由を聞くことだと言われたのですが、具体的にどこかと聞かれたので灘区のUさんだと伝えました。すると翌日、あれほど何度も言っていたのを翻し、灘区の福祉事務所から「敷金がでることになった」との連絡がありました。

今回、福祉事務所は本人に対し、繰り返して「敷金は出せない」と言っていました。ところが本庁に打診した直後に、急に「出すことになった」と返事がありました。福祉事務所と話して埒が明かない場合、本庁に事情説明を求めるのも、ひとつの方法だということがあります。やはり出せない理由はきちんとなかったのだと分かります。それをこちらが不服審査請求でもすれば、あちらは出せないならそのきちんとした理由を明示しないといけなくなる。し

かし、確実な理由がないのですから、そんな請求を出されると困る。本庁から灘区の福祉事務所に打診がいて、出すようにと指導されたのでしょうか。

こういったことの一つ一つを乗り越えられるかが、本人にとっては本当に綱渡りなのです。それにも関わらず福祉事務所がきちんと対応しないことが多くあります。私たちが知っているケースはごく一部なので、せっかく入院・治療をしてもきちんとその後のフォローを受けられずに再び路上に戻る人がまだ多くいるのではないかと心配になります。

他にも、病院訪問で感じるのがいくつかあります。誰のときでもですが、入院してもなかなかCWがすぐには来てくれません。野宿状態などから何もナシで入院する人には、パジャマや下着など、現金のない人には貸付金など、急ぎ必要なものがなかなか手に入らずに、困る場合も多いです。こちらから福祉事務所に連絡をするようにしています。

こういった一連のことは、全国的な福祉の締め付けと横並びで起きているように思えます。2007年7月に「おにぎり食べたい」と餓死した北九州の事件がありました。その頃、北九州市は高かった保護率をできるだけ下げないように、厚労省から出向してきた職員と一緒に北九州方式というやり方で水際（福祉事務所の窓口）で申請をあきらめさせたり、すでに生活保護を受けている人に、本人の意に沿わない辞退届を書かせたりということに躍起になっていました。

この事件を含め、05年1月、06年5月と3年連続で生活保護が受けられなかったり廃止されたことにまつわる餓死者が出ています。そのことが明るみに出て、法律家や活動団体から多くの抗議運動が起き、北九州方式のような露骨なやり方はかげをひそめました。

しかし、生活保護費の抑制の圧力のもと、いろいろなやり方で生活保護の締め付けは起きているようです。このように、受けられるはずの福祉をきちんと受けられない現象がこれからも出てくるのが危惧されます。

### 3. 夜中のこと

「はじめに」で少し触れましたが、2007年の6月末から、夜中回りというのを始めています。これは、いつも回っている19時から21時の時間帯ではなかなか人に会えなくなり、同時に野宿している人からは、他にもいっぱい人がいるよと教えてもらったのがきっかけでした。手始めに、夜中の駅周辺などを回ってみて、すぐに、いろんな人に会うことになります。

月1度くらいのペースで始めたのですが、毎回新しい出会いがあり、しかも皆定住しているわけでもありません。アルミ缶集めなどの仕事を持っていない人や、生活保護を希望する人も多いのでした。なので、始めてからしばらくは、ばたばたと保護申請が連続しました。まるで夜回り未踏の地域でした（実際そうなのですが…）。野宿している人が今のように全国で見られるようになる前は、日雇い労働者の多く住む寄せ場とその周辺が、おもに野宿している人と、その人たちを対象とした夜回りなどの活動が見られる場所でした。しかし、90年代も後半になった頃、バブル崩壊、建設業界の冷え込みと連動して、象徴的なブルーシートとともに野宿している人の数はどっと増え、全都道府県に広がります。そうして、各地でその人たちを支援する夜回りなどが始まっていったのですが、その頃はすべてが夜回り未踏の地。こんな感じだったのだろうかと思いました。

最初に相談を受けたのが、Hさんでした。以前は水道管工事の仕事をして家を維持していたのですが、仕事が減り維持していけなくなりそうになりました。それで自分で福祉事務所にアウトしたのですが、保護申請はさせてもらえず（保護のことを教えられず?）、結局家を失い野宿になってから、ずっと駅で寝ていたということでした。その人は、更生センターと一緒に見に行くと、知り合いがそこに入っていたこともあって、更生センター入所となりました。駅のすぐそばの、自分たちがいつも使っているところで寝ていたのに、夜中にしかいないHさんには、

誰も気づけなかったのです。私たちが気づかない人というのは、もっともっているのではないかと思え、不安にもなりました。

次に居宅の保護申請に同行したのは、聞き取りにも応じてくれた、梶原さん（仮名・26p参照）でした。野宿になって間もない梶原さんのことは、近くで寝ていた人が、「あの人は困ってるやろう」と教えてくれ、訪ねたのでした。実際、蓄えが底を尽きかけていた梶原さんは、アパートでの生活保護や神戸市の施設の話をする、すぐにでもお願いしたい、ということでした。すぐに昼間に会う段取りをし、敷金・保証人なしで入れてくれる大家さんに頼んで、部屋に入れてもらい、保護申請をしました。これから寒くなり、どうしようかと思っていたという梶原さんは、体を壊し、仕事に就けなくなって野宿に至った典型的な人でした。

また、何度か訪ねるうちに、保護になった人もいます。Iさんとは7月の末に出会い、少しずつ保護の仕組みなどを説明し、12月に申請となりました。最初、更生センターのことなども話したのですが、ああいうところに入ると、自分よりもっと困った人が出されてしまうのではないかと遠慮していました。幾度かの服役経験があり、その間にお金を騙し取られたりした後に、中央区の福祉事務所に相談に行ったものの、「住むところを見つけてください」と言われただけだったということです。しばらくは知人の紹介で仕事があったようだったIさんは、それもなくなってきつつあった冬に、アパートからの保護申請となりました。

夜中に会う人たちの中にも、アルミ缶や、日雇い仕事、雑誌集めなどの仕事に行っている人もいます。しかし、テントを持たずにしっかりと眠れない状況は厳しいものがあります。また、人の入れ替わりの激しいのも夜中回りで感じたことです。

その後は、保護申請もあまりなく、落ち着いて(?)いますが、それも結局はより難しい問題を抱えた人が残っている、という感じです。そのことは夜回りでも同様です。また、夜中回りは継続して会うということがよりしにくい、という状況がありま

す。定住してずっといるという場所がないので、昼回りでフォローといっても再び会うことが難しいのです。私たちの力量のなさを痛感させられます。

## おわりに

はじめで述べたように、神戸市全体の一斉夜回りの結果を見ると、ここ数年ずっと減少だったのが、今年は微増に転じ、168 人となっています。また、その中でも若年層の占める割合は増加しており、これは今後とも増加していく傾向にあると思われます。今、長引く不況や世界的な恐慌で、企業はここぞとばかりに派遣社員を大量に切り捨てています。日雇い派遣の問題点も次々と指摘され、日雇い派遣自体が規制されようとしています。

しかし、そもそも昔から寄せ場で行われていた日雇い労働については、変わらず無視され続け、何の介入もありません。また、日雇い派遣を規制するとしても、今現在それで食べている、それでしか食べていけない人たちへの救済策は示されないままです。そもそもの人を使い捨てる構造のおかしさと、それがつくられていった経緯を、きちんと認め、根本から正すことなしに、野宿を含む貧困の広がっていく現状を、打開していくことはできないと思います。

野宿には至らずとも、夜回りをしている私たちにとっても、ひりひりするような状況が続いています。就職難がやっと改善されつつあると思ったら、やっとなつかんだ内定を取り消される学生。健康保険が払えずに、病院に行けない人たち。いつ自分の身の上がどうなるか分からない。私たちの置かれている状況は、徐々に夜回りをする人／される人どちらにも厳しいものになってきている。その境界が実に曖昧になってきている。そのことを実感しつつ、しかし丁寧に、きちんと現状を追っていきたいと思います。そして、人とつながっているその担保だけは、確認しておきたい。まだまだ出会い切れていない人を訪ねながら。

(なべたによしこ / むらかわ なつみ)

## コラム⑥ 更生センター・更生援護相談所

JR 灘駅のそばに、更生センターという建物がある。ここは神戸市が生活保護法に基づいて設立した更生施設で、現在は住むところのない男性が入る施設になっている（女性は入れない）。3階が居住空間で、そこでは畳2枚程度の空間が占有でき、3度の食事が提供され、週2回入浴できる。

入居すると内部作業（内職）や外部作業（草刈など）、掃除当番などがある。6人部屋・4人部屋なので人間関係が難しく、そのため入所を希望しない人も多い。小遣いは月2,000円。禁酒を求められる。定員50名。

同じ建物の1階部分（2階が入り口なので地下のように感じられる）が更生援護相談所という社会福祉法に基づく神戸市立の一時宿泊施設である。夕方記名すれば無料で宿泊できる。朝8時ごろには出なければならない。ただ、雨の日は昼間もいることができる。また病気であれば、晴れていても、昼間もいることができる。

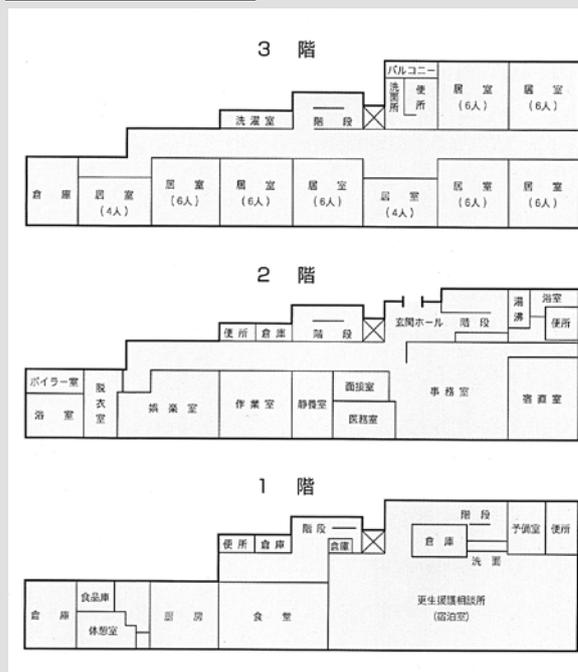
(写真) 更生センターの外観



更生援護相談所での食事は年末年始には出るが、年明けから次第に減っていき、3月頃からは出なくなる。それでも1日にパン1個が、位置づけははっきりしないものの提供される。シャワー・入浴は3週間に一度くらい。2段ベッドなどで80床ほどあり、年末年始には100人以上が宿泊する。

更生センターと更生援護相談所という2つの施設が同じ建物にあり、職員も同じなので利用者は混乱する。下（更生援護相談所）に泊まると風呂も食事もなく、毎日違うベッドで寝ることになり、前に泊まった人がシラミなどを残していくと痒い思いをする。

(図) 更生センター平面図



職員が「弱っている」と判断すると、「上にあがるか（3階の更生センターに入所し生活保護を受けるか）」と声をかけるので、「職員に気に入られた人には食事が出て、風呂にもは入れる」と誤解する人も少なくない。

週2回（月曜と木曜の午後）嘱託の医師による診察がある。急病であるか重篤ならばすぐ病院に搬送される。そこまでの状態ではなくとも、医師が病気かもしれないと判断すると近くの病院で検診するよう手配される。

病院では最初は治療・投薬はせずに診断結果だけを更生援護相談所に連絡する。その結果、病気だと診断されると、相談所は「医療券」を発行し、ようやく治療を受けられるようになる。治療を受けるためには更生センターに入所するか、（原則として）相談所に宿泊しなければならない。自分の住んでいるtentやそこでの仕事、飼っている犬や猫が心配で相談所に泊りたくないという人は医療を断念するしかない。

## コラム⑩ 神戸市の低家賃施設について

更生センター・更生援護相談所のほかに、自分で収入がある人のために「兵庫荘」（神戸市立）という1泊50円（月1500円）の施設がある。また「磯上荘」（神戸市社会福祉協議会）という1泊200円（月6000円）の低家賃の施設もある。どちらも、仕事が途切れて家賃を払えなくなると出されてしまう。

## 第3章 活動で出会った人々からの聞き取り

山本かえ子 五明泰作

鍋谷美子 今西裕哉

藤室玲治 三輪真子 宮地陽介

- 》小河さん「震災・冤罪で野宿に追い込まれて」
- 》梶原さん「野宿になっても完全に体を横たえて寝るのが恥ずかしかった」
- 》松宮さん「働きたいなあ。体は動かさなあかん」

●写真 松宮さんが一時期、寝起きしていた神戸市の更生援護相談所（17p 参照）。2段ベッドが並び、プライバシーはない。



### はじめに

第3章では、昨年に引き続き、これまで夜回り準備会の活動の中で出会った3名の方々に語っていただいたライフストーリーを載せています。一人は現在も野宿生活をしている方、二人は野宿生活から生活保護を申請し、現在は生活保護と年金によって居宅生活をしている方です。それぞれの方への聞き取りを行い、テープ起こしをしました。紙面の都合上、どれも実際に聞いた話よりは少し短くなっています。

夜回り準備会の報告書は、今回で4回目の発行になりました。最初の2回は「活動から見てきたもの」として、野宿生活をしている人々の置かれている現状を、医療や追い立てといったテーマ別にまとめて書いたり、個人のこととして記録にもとづいてまとめたりして、書いてきました（本報告書では、第2章がその部分にあたります）。

しかし、どれだけ個人との出会いをもとに私たちが報告書で記したとしても、読者に向けて発信する際は、野宿の人々のことを「野宿している人々」という枠で括って記述することになります。それは、夜回り・昼回り・病院訪問の活動それ自体が、「現在野宿生活ではない私たちが、現在野宿生活の人々のところを訪問する」という、非対称な関係で設定されているからでもあります。そうした関係性を自覚しつつも、声をあげることさえできない状況の

人々のことを発信していきたい。そして、「ホームレス」はこうだ、といった概念から捉えようとするものを超えて、一人ひとりの人生の重みを受け止めてもらいたい。そういう思いから、今年度も聞き取りを継続して実施し、活動で出会った人々の語りを発信することにしました。

前回もそうですが、これまで何度もお会いしている方々なのに、いざお話を聞いてみると、想像できないほど重みのある人生談が飛び出してきました。インタビューを通じて、私たちは皆、明日のことはわからない人生を、同じ社会でともに歩んでいることを改めて実感しました。自由に自分の意思で生きていられることは当然のことではない社会の中、精神的にも身体的にもゆっくり休むことができない野宿生活を続けていく。それは、とてつもない強さが要求されることなのだ、教えられました。

だから、皆が強くなっていくべきだと言いたい訳ではありません。現在の苦しみだけではなく、これまで生きてきた中で受けた苦しみをも背負って、つらい状況で過ごしている人々が多い。だからこそ、排除や無関心ではなく、ともに生きていくことが大切なのだと言いたいのです。そして、少しでも苦しい思いをする人々がなくなる社会にしていけることが必要だと思います。

(やまもと かえこ)

## 「震災・冤罪で野宿生活に追い込まれて」

聞き手・山本かえ子 五明泰作

- 小河さんと私たちは、数年前に歩道橋の下ではじめて会った。話好きな方で、訪問するたびにいろいろなことを教えてもらった。その後、体を崩して入院し、居宅生活になったものの、さまざまな事情で野宿生活を始めた小河さんに再会。昔、「俺は野宿生活をさせられることになったんや」という言葉を思い出し、インタビューをお願いしたところ、快く引き受けてくれた。聞き取りは4時間に及び、衝撃の事実が語られた。

### 野宿になるまでの生活

#### 生い立ち

昭和 17 年生まれ。生まれは神戸。ほとんど生い立ちは神戸で過ごした。小学校、中学校も神戸の学校。中学校を卒業してから映画館に、映写技師の見習いとして就職した。映画がとにかく好きで、映写技師にあこがれていたから。映画館に映写技師の免許を取るつもりやったが、映画が斜陽化していったので、入って 2 年しないうちに客がほとんど入らなくなった。昭和 33・34 年頃です。そんで、友達のお父さんが靴屋をしていて、たまたま遊びにいったとき「仕事探しとんねん」といったら、「靴屋せえへんか」といわれ、靴会社を紹介してもらい、就職した。

#### 靴屋の配達仕事

それからは靴屋一色で働いていましたわ。わしの仕事はどういうものかといえ、靴屋でも中で靴を作る仕事ではなくて、ほとんど毎日運転ばかり。靴屋というものは内職でもっているんですよ。各家庭での部品の内職で。その内職の仕事材料を、車で内職の人のところに配達するのがわしの仕事やったんよ。ほとんど朝 9 時くらいから、神戸から宝殿あたりまでの間を各家庭 30 件、内職の材料をおろして、その前の日にできたやつを回収して、それを夕方会社にもって帰ってくるの繰り返し、という仕事やったんやね。配達から帰ってきたら、一時間くら

い出荷の手伝いをやとった。零細企業やったんで、運転手がわしひとりやって、事務員一人が男で、そのほかの従業員はみんな女の人やった。昭和 34 年から平成 7 年までの 36 年働いていた。映画館での仕事をあわせると、40 年近くの年金があると思う。

#### 震災で仕事と家を失う

それからあの阪神大震災。ちょうど忘れもせん、連休やって。そのとき、電車も使えんかったので、自転車で会社に行ってみると、全焼で、社長夫婦も焼け死んでしまった。極端な言い方をすれば、連休やなかったら社長夫婦も死んでなかったわ。たまたま連休で、連休明けにもって回る荷物が多いわけですわ。だからわしを楽させるためにこなくてもいいのに、社長夫婦が朝から積み込みに来ていて、そのせいで焼け死んでもたわけや。だから退職金は 0、失業保険も会社が全焼していたので、番号も事務員任せで知るわけもないし、自分のアパートも全壊で自分のことで手がいっぱいやったし。もらえたのは 8 ヶ月後やった。

#### 妻の病死

そんなとき、うちの女房が入院してて。震災の 2 ヶ月前に倒れたんよ。うちの女房は原爆症やって、芦屋で働いていたときにぶっ倒れて病院に運ばれた。そんなときにはじめて原爆症って知ったんよ。長崎で胎内被爆やって、手帳を持っていたことをずっと隠してたみたいで。だから震災のときは女房は動けん

かって、1ヶ月で家のことを整理し、娘に女房のことを頼んで、大阪の東のほうに住み込みで建設関係の仕事をしにいったんや。建設現場はまったくの素人やから、大変やった。女房はその後、数ヶ月で亡くなった。

### 日雇い仕事で苦勞

なんで大阪に行ったかという、神戸はもうぐちゃぐちゃやったから仕事があらへん、せやから大阪に行けば仕事があるやろ、という考えやったんです。でもね、後からみたら、神戸のほうが、解体とか仕事がよくさんあったんや。大阪から車に乗って、行くのは神戸の現場やったりした。道路が混んでてなかなか着かへんで、朝早くに出てても着くのが午後。1日拘束されても仕事は半日しかできひんで、収入が少ななったりしたね。

2年ぐらいたつと仕事がなくなってきた、今度は大阪にある他の建設会社に移ったんよ。この移ったんが、後々の人生、下手打ったんの始まりやったんやと今では思てるんやけど。

### 芦屋で死体に遭遇

次の会社でも1年せんうちに仕事がなくなってきた、忘れもせん、平成10年6月12日に会社やめて、ほいで友達に「大阪も神戸も仕事あかんわ」と電話していると、姫路に友達がいて、「それやったらうちこいよ。うちはまだようけ仕事あるで」といつてくれた。履歴書を郵送で送って、さあ荷物をどうしようか迷ったわけやね。住み込みやったから荷物も多かった。ほかすのももったいないしと思つて、よし自転車で行こうと決めて、友達に「荷物ももったいないから自転車でいくわ、せやから3日待ってくれ、自転車でいくから」と電話した。

12日の夕方に大阪を出発した。そんで芦屋に13日の夕方に着いて、国道43号線沿いの郵便局の歩道橋下で、仮眠しようと思つて、寝袋出して寝てしもたんよ。目がさめたのは14日朝4時。時間ははっきり覚えてる。そしたら郵便局のまん前の新築の家の奥さんがカーテン開けてこっち見よったわけす

わ。またあんなとこで変な浮浪者が寝とるわとおもったんやろうね。けどね、あれみてもらってなかったら、俺、後でもっと警察にやられてましたわ。それみて、「ここから出なあかんわ」と思つて、「その前にトイレに行こう、このへんやったら公園しかないわ」と思つて、川沿いの公園にトイレしに行ったんですわ。4時半。こっからが話がややこしくなんねん。

公園に行つて、トイレする前に、4・5人がやいやい言つてるわけです。とりあえず我慢できへんからトイレをすまし、出てきたらやいやい言つていた男と女が「おじさん、おじさん」と呼ぶわけや。この辺に知り合いもないしと思ひながら「どないしたん」と聞いたら、「人死んでんねん」。「人死んでるってわかんのかいな」「みてみて、真っ白なんや」、そしたら恰幅のいい小太りの男の人が倒れてて、真っ白やった。こらあかんと思つてたら、その人らが俺に、「交番に言つてきて」と、こうきたんです。「交番に言つてきてって、わし今来ただけやのに。あんたらいつ来たん」「10分ほど前や。やけど私これから弁当つくらなあかんし」とか言うんですわ。そんな殺生な、俺トイレしに來ただけやのに。「よっしゃ、じゃあ行つてやるけど、あんたらそこに居ってくれるんやな」と念をおした。

### 参考人として連行される

そんで交番へ行つたんやけど、おまわりが起きへんのですわ。しょうがないから交番の電話で本署に事情を電話してパトカー呼んで、そんで現場に戻つたら連中が誰ひとりも居れへん。なにこれと思つたらパトカーが着いて、警察にすぐに囲まれて「通報したんあんたか。あんたが発見者か。」と言われた。「違う違う」といつて事情を説明したが、「ほかに誰も居れへんやんか。あんた第一発見者ちゃうか」と疑われ、「とにかくパトカーに乗つてくれ」、こうきたわけすわ。「意地でも乗らん。こうこうで明日までに姫路に行かなあかんのや」と友達の名前を教えて、電話番号も教えたが、「それは後で調べる。今はこの倒れている人をあんたが発見したとす

るしかないやろ。あんたが通報したということは、あんたが発見者やで。ただ、あんたが第一発見者やとすれば、その逆のことも考えられるやろ」とこうなってきたんや。このときに、「ああ、しまった」と思った。「とにかく本署にきてくれ。姫路には警察から連絡する」といわれた。ですから、仕事はペケですやん。ただ、救いは、初め居た4・5人のうちの一人が「〇〇」という名前と呼ばれてたのを覚えてたこと、そして朝にカーテンから覗いていた奥さんが居たことだけ。

### 警察署での取調べ

しょうがないから本署にいったら、検死の結果を待っている間は（警察の対応は）穏やかで、朝ごはんは近所の喫茶店のモーニングをとってくれた。ごはんを食べている間に鑑識が帰ってきて課長に検死の結果を言ってんねんけど、それがわしにも聞こえんねん。「死んだんは朝3時ごろで、後頭部を打ってる。あんたの殺人の線は低いけど、手提げ鞆からお金が130万なくなっている」と、こうきたわけですね。「朝3時頃殺してお金を奪って、もとの場所で寝たふりした」と、こういうふうに疑いがかけられたわけですね。

それからもう、大変ですわ。その日は10時からずっと取り調べ。「とにかくありのままを言ってくれ」といわれたから、「カーテンから覗いていた奥さんの証言を取ってくれ」といった。証言は取ってくれたが、「死んだのが3時、起きたのは4時。じゃあその間をどうやって証明する？」寝てる間をどうやって説明する？警察っていうのはこういうところから攻めてくるんですわ。「殺人はいとして、お金出しや」とこうくるんですわ。

「ちょっと待ってや。それやったら俺の前におった4・5人の人間を探して、聞いてくれ。」「じゃあその4・5人って誰なんや」となったんです。そっからです。もうずっと、言い合いですわ。「何のために芦屋で寝たんや」「たまたま芦屋に着いて眠とうなったんや、偶然や」とか何とか、言い合いばかりで、そっからがきつかった。

警察っておもしろいで。ドラマとかでもたまにあるけど、なだめ役とおどし役とがある。一人の奴は、「お前、どうせホームレスやろが。だから金欲しかったんやろが。130万どこに隠したんや」と机をバーンと蹴る。極道みたいな刑事や。「知らん、とにかく知らん」そこでわしもムカッときたから「もうええ。もうわししゃべらん」と黙秘権使ってしもたんや。30分ほどしてそいつは出て行った。そしたら今度は入れ替わりに、優しいような、痩せた、丸顔のおっちゃんが来たんや。「な、わかるわかる、わしもようわかんねん。やからな、ちゃんと言うてな、楽になれや」。どういうことやって感じや。そうしよるで。

それまで「小河さん、小河さん」と言うってたんが、今度は号数になったんや。俺のその事件が、「153号事件」とついた。そしたら、取調室で俺と面と向かってるときは「小河さん」と言うんやけど、芦屋署って狭いでしょ、そしたら表で話してるのが聞こえんねん。「153号どないしとう、まだか」と、課長が聞いとるのが聞こえてくるんですわ。はじめは何のこっちゃと思ったけど、何回か聞いたらどうやら俺のことを指しとるんがわかった。そやから、刑事に「俺153号って言うんやろ」って聞いた。「えっ、何のこと」って刑事はとぼけよったけど、「この事件153号なんやろ。だから俺のこと153って言うんやろ」って聞いた。そしたらその刑事さん、ええ刑事さんやったから「そこまで言われたらしゃあない。小河さんな、とにかくこの事件関わってしもたんや。仮にあんたの言うていることが本当として、あんた今この4・5人を探し出さんことには、ここから出られへんで。わしはあんたを信用する」と、うまいこと言うわけですね。「ありのまま言うてみ」と言うから、「ありのままや！これまで言うってたんが」と言うたつた。

そんときはもう夜の7時頃ですやん。お腹減るし。昼飯出さへんとお茶ばかりで、お茶腹や。「とにかく今日帰すんか帰さへんのか。帰さへんのやったら晩飯食わしてくれ。それまでしゃべらん」と言ったら「わかった」と。ほいで、ドラマで井とか出て

くるけど、あれはウソ。飯と味噌汁と魚の煮付け一個ついただけ。どっかの飯屋から取ってきたんやろ。「食べたら一時間休憩しよう」って言うから、「外の空気吸わせてや」と言ったら、「ごめん、今それはできへんねん。調書取ってあなたが判押すまで」ときた。「何で俺が判押さないかんねん」と、つぶねた。俺は最後まで押さんかった。押したら犯人にされて冤罪になるやん。やから、「この4人絶対に捕まえるまでは判を押さへん」と思った。そしたら「この4人捕まえよう」ということになって。その頃はもう夜の11時、やっとそういうことになった。「明日探しに行こう」、それじゃあどこに寝るかといったら、廊下です。さすがにブタ箱とは言わへんかったわ。「ここで寝ればええわ。ただ朝3時起きやぞ」と仮眠のベッドを持ってきてくれた。

#### 芦屋署での拘束から野宿へ

それから1週間、毎朝3時に起きて、4人探しをやった。そしたらとうとう、4人のうちのひとりを見つけた。4日目になって、やっと刑事が「お前、人相覚えとるか」と聞いてきた。4人の中で一番顔をはっきりと覚えてて、犬の散歩をしていたから、絵のうまい刑事が似顔絵を書いてくれた。それでも、人間の記憶って限界あるね。犬の顔とか聞かされたけど、思い出されへんかった。

そしたら、やっと見つけたんです。医者やった。自分の名誉があったから逃げたんやね、結局は。汚い奴やと刑事も言った。そんで、刑事が「とりあえず一人見つかったから、あの人の取調べがおわるまで仮眠室で休憩したらいい」と言ってくれた。そこで休憩してたら、課長が「小河さん、長い間すまなかつた。この人がはっきり言うてくれた。あんたが後やということが分かったから。ただし、お金はまだ分からんよ。殺人の疑いは半分晴れたけど、あんたの3時から4時までのアリバイがない」と、こうきたわけや。

「まだ殺人の疑いがあるのか。ブタ箱にはいらなあかんのか」と聞いたら、「それはできん。いちおう外には出てもらう。JR 尼崎駅と三ノ宮駅の間は

自由に行き来していい。ただし、その範囲から出るときは警察に許可をもらってもら」。何でその範囲かという、その死んだ人が死ぬまでに行動したであろう範囲なんです。そんな締め付けある？既に事件から10日経っていた。「ほんなら俺今からどうしたらええん？」と警察に聞いたら、「一応強制はできへんけど、警察としてあんたを束縛はできる。事件の嫌疑者として。130万を盗った可能性は一番あんたが高いからな。できたら芦屋におってほしい。何かあったらすぐに来てもらえる。」「そしたら家買ってくれるん？」「あほなこといな。芦屋川の橋の下に小屋つくってそこにすんでくれ。その交番には言うておくから。」結局それに従うのが一番自由やったから、「よっしゃ、腹くくった。従う。ただホームレスの経験ないんやで」といいたら、交番が材木屋にいうて掘っ立て小屋の道具買ってくれて、芦屋署公認のような小屋ができたんです。そっから野宿生活がはじまったんです。

### 野宿になってからの生活

#### 野宿でどうやって食べていくのか

橋の下に行ってみると、先人が3人おった。せやけどその3人は働かん奴らやった。はじめのうちは、ある刑事さんが自腹で弁当とかを買ってくれたけど、それもなくなってからはどうやってお金を作っていくか、まったくわからなかった。

まず苦しんだのは、どうやって食べていけばいいのかということやった。刑事に聞いたら、「ごみの日によく動いてるみたいやから、ごみで稼げるみたいやで」と教えてくれた。その当時は、まだごみ自由やったんですわ。芦屋やから浮浪者もそんなに多くいなかったから「目立つしイヤやな」と思いながらも、食べていかなあかん。やから、ごみの日を調べて自転車であちよろしていたら、一生懸命探している人がいた。「すいません、そこで警察にホームレスさせられているんですけど……」「なに、警察？何で警察がそんなこというねん。おっさん気いおかしいんとちゃうか。向こう行け」と馬鹿にされ

た。それで、「こら声かけたらあかん、黙って見とけ」と分かって、次からはちょっと離れて、ごみを集めている人を観察して、どうしてるんかメモを控えていった。一番多かったんが缶カンやった。

集める方法は分かったけど、売り方が分かれへんかった。帰ってきたら、残りの3人はズボラな奴で、コンビニの弁当を拾って食ってる。ところがどないしても、わしの頭には「弁当拾って食ったら乞食や」と思ったから、やらへんかった。「ホームレス」ということはそこまで頭にこなかったが、「乞食」と言われることはどうしても許せんかった。せやから、警察からの弁当がなくなってからは何も食べなかった。

### 野宿生活 工夫と苦勞

それからやと缶を少しずつ集めてきて、さあ今度、どないして売っていいかわかれへん。せやから、電話帳で廃品回収のところに全部電話をかけていった。そんなかで十何件目かで阪神西宮のちかくのある廃品回収で買い取ってくれるのがわかった。とりあえずそこまで売りにいったら、忘れもせん、初めてもらったお金が375円やった。これじゃあ弁当も食べられへんと思って、店の人に「2・3千円稼ぐにはどのくらい必要か」聞いたら、「つぶして2袋ほどのいる」と言われた。

帰ってきてから、「そや、ごみばつか頼ってたらあかん、コンビニの缶をもらおう」と思って、コンビニの人に事情を言って、缶をもらってきた。そしたら2袋どころか4袋もできた。それを売りに行って3,000円もらった。「ああできた!」と思って、帰りにシーサイドのダイエーで買いもんした。事件から1ヶ月半後ですわ。そやからその1ヶ月半はほんまに苦しかった。食べるもんなかったからね。そやから3人が食べていた弁当がほんまに手が出るほどほしかった。でも手をつけなかった。そやから3人から総スカンくらった。「おっさんいいかつこすんな」とけんかになって、「おっさんでていけよ」「俺こっから出ていけへんから、おまえら出ていけよ」といったら出て行きよったわ。

そっからしばらく一人になったんやけど、だんだん流れてくる人がでてきて、多いときに10人くらいになった。そのうち6人死んだんや。一人は酒飲みで、お墓に備えとる酒を飲んだりして、そのまま墓石抱えて死んどった。酔っ払って川に落ちて死んだ奴もあつた。一人は肝臓ガンで腹ふくれとつた。俺はあそこで4人見送つた。あと2人のうち、1人は病院で亡くなり、1人は自殺したんや。元気やったんやけど、JRに飛び込んだ。

生活も、缶集めを覚え、荒ゴミ集めを覚えてきたら、だんだんと稼ぐ方法もわかってきた。缶集めも、缶集めをしている仲間が「尼崎へ行ったほうが西宮で売るよりも倍でうれるで」と教えてくれた。半年後には自分で生活できるようになっていた。

### 人間の卑怯さと情け深さを知った、橋の下

弁当買ってたらお金が足らへんから、自分でコンロを作って自炊するようになった。そしたら近所の人も、事情が事情やからかわいそうに思たんやろね、缶集めしている間に米をおいてくれていたりしてくれた。人の関わりは、はじめはよかつた。しかし、それから中学生がいじめに来たり、議員などもきて追いたてをしにきたりした。やけど、警察が関わっていることやと知つたら、みんな逃げていった。逃げていかんと話をしに来たんは、共産党のある議員1人だけ。

人間て卑怯。いざとなつたら逃げる。1対1ならかかってくるけど、何か権力のあるものが関わつてると知つたら、途端に逃げていく。ほんまに汚い。それを知つたあの橋の下。逆に、情のある人の情け深さも知つたね。まともな生活してるときは考えなかつたね。風呂でも、儲けない風呂屋に行きますやん。そしたら、毎日300円から400円かかる。そしたら、「風呂だけでよかつたらうちとこ入りに来る?」とか言ってくれた人も居つた。「甘えたらあかん」と思って、俺は行かなかつたけどね。そないて言うてくれる人もおつたし。

芦屋は上品ぶつた人が多いけど、汚い人もおるで。俺を利用しようとする人もおつた。しょっちゅう差

し入れしてくれる奥さんがいた。その夫婦にたまたま離婚話が出とったらしいんやけど、俺は知らなかった。「よう差し入れしてくれる人がいる」と思うぐらいや。そしたら旦那のほうが、奥さんが俺とできていると思ったらしく、包丁持って俺が寝ているところを襲いに来たんや。そんなとき俺はカラスを飼うとして、カラスに助けてもらった。

そのカラスは、昔、怪我しとったんを見つけて、動物病院に連れて行って手当てしてやった。そしたらなついたから、カー子と名づけて、小屋作ってあげて、一緒に暮らすようになった。今でも、小屋やった箱は捨てられなくて、持ってる。周りからは「何でそんなん持っとるん」と笑われることもあるけどね。賢くてね、わしが買い物に行くときはどこかに遊びに行って、戻ってきたらちゃんと肩にとまっていた。ご飯は、ドッグフードを水に浸したやつに、俺が食べる用の炒めた肉をちょっと混ぜてやったりした。夜になって俺が寝ると、必ず小屋からちょこちょこやって来て、一緒に寝てたんや。

それで、あの日の晩、わしがぐっすり寝込んでいたところを包丁を持った人が襲ってきたとき、カー子が「ギャーッ」ってものすごい声で鳴いて、包丁を持っている手をついたんや。「痛たたた！」という声で、俺は目が覚めたんや。ほんま、「恩返しであるんや」と思ったよ。カー子がおらんかったら、俺死んどったね。俺は警察にとんでった。襲撃の犯人やと思ったからね。そしたら、後で奥さんのほうが、俺を利用しとったんがわかったんや。カー子は半年で死んでしもた。怪我がやっぱり十分に治らんかったんやろな。

#### 弱いものいじめの連鎖—襲撃してきた子どもと話し合う

子どもたちも数人、襲撃に来たこともあった。カシラは、朝鮮人の子やって、指図して石投げさせよった。2回ほど石投げられたが、そんなときに「コラッ」とか言うたらあかん。石も当たったりしたけど、我慢して「どれがカシラや、顔を覚えてろ」と思って、顔を見とったんや。近くにある祭りに行ってみたら、その子が何人かで川べりで遊んどったん

を見つけたんで「ちょっとちょっと」とその子を呼び止めて話をした。はじめは「何やおっさん」とごっつい剣幕できとったけど、「おっちゃんあんたに話があるからおいでや」と言うたら、小屋まで肩いからせてついて来よった。

「あの連中、あんたの子分か」と言うたら、「そうや、わしの子分や」と言いよった。「どこや」と聞いたら、「わしら、〇〇中学や」とはっきり言うたんですわ。それで、「ほうか、〇〇中学では、おっちゃんみたいな弱い奴に石投げてもええと教えとるんか」と、ポンッと言うたったんですわ。

「えっ、石なんか投げろって言うてへんで」と言うたんやけど、「何言うとんねん、おっちゃん、ちゃんと見たで。あんたがああ2人に投げさせたやないか。おっちゃん、あいつらを警察に連れていくで。あんたがカシラやって言うで。でもおっちゃん、それをしたないから、あんただけ呼んだんや。おっちゃんも男や、あんたも男や。男と男で話ししようや」って。そしたら、黙ってしもた。

ほんで、たまたま、そんなとき俺が持ってたマンガの本5・6冊を見つけて、「おっちゃん、このマンガ、おっちゃんのか」と言うから「そうや」と言うた。「ほんまか、これごっつい人気あるマンガやで。これ売ったら金になるで」と言うから、「おっちゃん缶カン売ってるからええわ。欲しかったらやるわ」と言うたら、「おっちゃんごめん！僕がやらした、もう二度とさせへんから、謝る」と、そらもうはっきり言うたんや。「何でやったんや」と聞いたら、「おっちゃん、僕な、子どもの頃から散々、『北朝鮮や』というのでやられてきたんや。『いつか、弱いものに仕返ししたる』って思ってた。そしたらおっちゃんらが来たから、おっちゃんに仕返ししたんや。悪かった」と頭を下げて謝った。「そういうことやったら、おっちゃん警察に言わんから、仲良うしよう。これから何かあったらいつでも来てええよ。話聞いたるから」と言うと、「夜中でもええか」と言うから、「かめへん、いつでも話聞いたる」と言うたったんや。「マンガ持ってってもええか」と言うから、「ええよ」と持っていかせた。

そしたらあくる日、仲間 6 人を全員連れてきて、一斉に「おっちゃんすみませんでした、ごめんなさい！」と謝った。その後もその子はしょっちゅう遊びに来た。その子が引っ越すとき、お父さんも一緒に「この子がお世話になったようで」と挨拶しに来た。国の違いがあつてしんどかったこともあつたのと、父親も母親も働いてて、家に居らんかったみたいやから、さびしかったところもあつたんやろな。

#### 事件は迷宮入り―芦屋から神戸へ

平成 14 年 10 月に事件が迷宮入りした。芦屋にいるのがイヤになって、ブルーシートとか何から全部自分で用意して、神戸に来て、歩道橋の下に住むようになった。場所があつたから、粗ごみを集めるようになった。当時、神戸市はゴミの規制がそないに厳しくなかつたから、かなり集められ、生活できた。こんとき、YWCA の夜回りの人たちがやってきて、話をするようになったわ。

そうしてるうちに、ある人と、お茶を飲みに行くなどして親しくなつた。その人がたまたまいた公園を追い出されて、わしを頼ってきたから、一緒に生活するようになった。そうしているうちに、その人と仲が悪くなってきたので、こいつと離れたほうがいいと思つた。

そんなとき、もともと悪うしてた心臓が具合悪なつて、入院してバイパスを通す大きな手術を受けたんよ。芦屋に居たときも、4 年間に 2 回救急車で運ばれてた。警察の拘束中にひどくなつたということやつたから、医療の費用は警察が、これだけはちゃんとしてくれて、神戸に来てからも通院できるようになった。普通はあかんのですよ、医療だけの福祉を受けるっていうのは。「あんたのような例がないから、特例や」と言われた。そう言うたかて、あんたらが特例にしたんやんかってことやけど。

退院するとき、まだ年齢が足りひんから年金が出えへんで、生活保護を受けて居宅で暮らそうと思ひ、福祉のほうに話をした。「春日台なら入れる」と言われたんやけど、そら入れるわ。家に下見にいくと、ド田舎で冬は寒いし、人に聞けば「朝はタンクの水

が凍つて水道出ませんで」と言われた。「そんなこと」と思いながらも、家がもらえるのならと思つて受ける気で居たが、福祉の人が極道みたいにメチャクチャな人やって、その人と喧嘩になつて、生活保護をやめてしもた。

#### 年金生活―借金の肩代わりで再度野宿へ

それからは、元町の友達のところに「年金出るまで居らして」と言つて、居らしてもらつた。そのあと、年金出るようになり、尼崎で、汚かつたことやけど部屋を借りて暮らしとつた。1 年 2 ヶ月たつて、その間に娘が結婚していたんやけど、あほなことに娘の旦那が友達の借金の保証人になつて、その友達が逃げてしもて、借金を抱えるようになった。娘の旦那はまだ若いですから、給料も安いわけですわ。銀行から月に 15 万払つてくれといわれてきた。こらあかんと思つて、「よっしゃ、俺の年金使え。その代わり俺はもう一回ホームレスに戻るぞ」と言つて、年金を渡して芦屋に戻つた。旦那は「自分らの給料から返す」つて言つとつたが、「そのお金は子どものために使え」と言つてね。

ところが、その時分の芦屋は、ホームレスの追い出しがかかつた。警察のほうに寄つてみたら、配置換えにより当時の職員は居らず、ただ一人、当時の交番勤務の人だった人に会えた。「あんたがここにおんのは大目に見るけど、住民の苦情には対処できんぞ。それと小屋は建てんな。」と言われた。やけど、当時とまったく周りの目が違つた。また、ゴミもほとんどなかつた。こらあかんと思つて、神戸に戻ろうと。そして、前居た歩道橋の下、今のところに暮らすようになった。

今は近くに居る仲間と一緒に粗ごみ集めて生活してるが、11 月から神戸市もゴミの収集が厳しくなる。借金を全部返済したら再び年金で家で暮らそうと思つとつたけど、11 月から食つていけるかどうか、不安や。

## 「野宿になっても、完全に体を横たえて寝るのが恥ずかしかった」

聞き手：鍋谷美子 今西裕哉

- 私たちが梶原さんと出会ったのは徐々に寒さが増してくる、秋の初めでした。そのとき梶原さんの所持金は1,500円。野宿になる直前の5万円ほどの蓄えを、切りつめ切りつめ、半年ほど過ごしていた後でした。これから寒さも本格的になり、お金も底をつき、どうしようか、というところだったそうです。梶原さんは、インターハイ出場、電電公社勤務など、華々しい経験がありました。そんな梶原さんが野宿に至るまでの大きな契機は、やはり家族との離別だったといいます。

### 野宿になるまでの生活

#### 5人きょうだいの長男として

生まれは大阪です。家族は、両親と姉1人、弟2人、妹1人の5人きょうだい、7人家族。で、2番目の長男やった。生まれたんは、終戦直後の昭和21年9月23日で、今満61歳。もうすぐ、62やけどね。親父がフィリピンのミンダナオ島で終戦知らずに4ヶ月間逃げたて、120人おった部隊の3分の2が死んでからやっと終戦を知り日本に帰ってきたそうすわ。それから生まれたのが僕ですわ。大阪で、小学校・中学校・高校と通って、昭和44年(23歳)に結婚するまでの23年間、親と同居してた。

ちっちゃい頃は、自分で言うのもなんやけど、出来のいい子やったと思いますわ。勉強とかも含めて親が心配するようなことはせんかった。「長男やから、がんばらなあかん」って常に親から言われてきてたし、自分もその気はあったしね。それとね、母親が一人で子どもを育てたってことが多かったんです。というのも、親父は、大手電機工業会社の工事関係に勤めていて1年のうち3分の2は出張に行って、ほとんど家におらんかったし、長期になると2年半は帰ってこなかった。海外に行ったりね、サウジアラビアやらチリやらインドネシアやら。そやから、母親とのちっちゃい頃の思い出はあるけれど父親との遊んだ思い出はないんですよ。親父がほとんど家におらんくて、母親だけで苦労しとうのが分かっと思ったから、母親を助

けたいと思ってたし、下のきょうだいの模範にならなあかんと思ってたね。当時のことやから、給料も低く、おやじの給料だけでは苦しかったと思いますね。姉は高校行かず、すぐに働きだしてたんで自分も高校に入らんと働こうとしたけど、「高校は行かなあかん」って母親に言われて、「ほな、がんばらなあかん」って高校に入ったんです。

#### バスケットに夢中の高校時代

高校に入る頃は、周りの生活状態が変わってきたころやった。経済が好転して、そしたら、働く人も給料が上がってきてね。高校では、バスケットボール部に入ってた。2年になって才能が開花して2年生ながら3年生に混じってレギュラーを張れるようになってきて、それで、2年生の時は新潟のインターハイにでて、3年の時にキャプテンになり広島のインターハイに出場したんです。3年の時に、母親に卒業後のことを聞かれて、「バスケットボールしたいし、大学進みたいねんけど」って進路相談した。母親が父親に帰ってきたら話してみてくれるということになったんやけど、おやじはその時チリにおって帰ってくるのが年明けで決断を下すには遅かったんですわ。バスケ部の顧問が関西大学のスポーツ推薦で入れるようになるからって言われたんやけど、当時の推薦は紙の試験を受けなくていいだけで入学金とかの免除はないんですわ。当時、家計はカツカツで姉は働いて家計を助けてたし、妹は高1、弟が中3と中1やったから、母親の

顔を見ると相談できなかった。それで、先生に相談したんです。そしたら、バスケット部の顧問が実業団を探してくれて、電信電話公社が見つかった。大学の推薦のことは抜きで「電電公社が来てくれって言っているから電電公社に行くで」って母親に言うた。今思い返せば、高校までは自分を抑えていたんやな。でも、それには、今も後悔は全くしてないし、ええ青春を送ったと思えます。けど、楽しくはなかったなあ。

### 人生が楽しかった電電公社時代

電電公社には実家から通ってました。その頃は最高やったね。週2日は好きなバスケットを仕事をせんと出来てたし、試合があれば、勝ち進めば1週間は好きなバスケットに熱中できたから。また、国体とかで遠征するときは、出張旅費が当時1200円の手当が出とったんですわ。当時、ホテル1泊700円やったし、民泊で300円、きつねうどんが30円の時代やったから。それで、お小遣いができて。給料が1年目は1万2500円やったんやけど、高度経済成長の時期やったんで、やめる年の4年目は2万7千円になった。でも、自分の食代を稼ぐだけで精いっぱいやったからね。自分の衣食住を一人ではまかないきれへん。やから、他の人も大体は実家から通ってる人が多かった。電電公社には4年間勤めました。18歳から22歳まで。自分の好きなことをしながら仕事できて、その期間が人生で純粋に楽しめたなあ思います。

まあ、4年目に人生における転換期があったんですわ。それは、西日本選抜の3月初めの合宿の練習のとき、腰を痛めてしもたんです。はじめは、ぎっくり腰や思ってたんけど、1ヶ月くらい経ったとき、腰がどんどん曲がって行って、大きな病院で検査してもらったら、腰の骨が神経を刺激して背骨が真つすぐにならんかった。そこで、いろんな治療をして半年後には人並みに走れるようにはなりました。けど、秋の大会の時、自分の思うようにプレーができんようになって、バスケット部辞めて仕事も辞めようとしたんですわ。そのとき、監督が「コーチ見習いで公社にいらいいやん」って言ってくれたけど、それで甘えると自分がみじめに思えたんやな。結局、電電公社は辞めました。

### 父親との仕事・転機

腰が痛くなる前に親父が仕事を定年退職してて。電機工業でしてた仕事を仲間3人と下請けでまわしてた。そこで、若い人の力がほしいということで、人を探してたんです。おやじが公社を辞める半年前に「手伝ってくれへんか」って言われたんが踏ん切りをつかせてくれた。というよりも、やめても仕事を失う心配がなかったからね、そのことも影響してたんやと思いますわ。

それから、波乱万丈の人生が始まったんやね。親父と仕事して一年目の昭和44年(23歳)に電電公社の時から付き合いのあった子と結婚した。親父と仕事をやりながら、出張、出張で親父はこんなふうに通ってたんかって思ってね、これなら帰られへんなど思ったね。娘が昭和45年(24歳)に生まれた。その時に万博があつて、そんな時からかな、もう給料がウナギ登りになったんですわ。親父と仕事したんは、5年間。やめたんは昭和48年(28歳)。僕が結婚して親父と働きだした当時は海底ケーブルなどの仕事がばんばん入ってた。給料とは別に出張旅費が出てたし、給料が7、8万円で同世代の3倍くらいやったからな。

### 初めての借金

それで、遊び癖がついたんやなあ。人の2、3倍の給料をもらってたことで、おれの内にひそんでた悪いんが出てきたんやな。お金を全部家庭に納めてたらよかってんけど、同僚が一人もんぼっかりやから、「遊びにいこか」って言われたら「いこか」って言って飲みに行ってまう。このころは飲み屋とかで、飲み一本ですわ。当時思いましてん、「これがおれの本性かな」って。でも、博打とかは、親父と一緒に仕事をやっているときは、やらなかったね。飲む方の遊びのほうにのめりこんでた。外で女は作ったりせん。生まれてこのかた、付き合いから別れるまで浮気なんかしなかった。男やから、花街には行ってたけどね。花街っていうんは、芸者さんがお酒をついでくれたり、踊ってくれたりするところ。大阪で言うと新町やね。不相応に無茶しすぎたんやね、その時にギャンブルとかせんかったから、そのままおやじに「新町で借金

70万作ってしまった」と言うたんですわ。親が出してくれたからどうにかなったんやけどね。

このときの会社は親父と仲の良かった2人の仲間と共同出資やったんです。そのうちの親父が長でやってたんやけど、軌道に乗り出して2年目に一人欠けてもた。それで、二人でやってたんやけど、金銭的トラブルが出てきて、片っぱは仕事量多く、片っぱは少ないんやけど、どっちかにつくと親父が相方に言うたんです。けど、おやじは昔堅気の考えの人やから、お前の好きなほうを取れって言って分裂さした。もちろん相手はええ方を取るわな。それで、親父は梶原電気工業を作ったんです。

1年間は細々とやっていけたんやけど、1年たったころから、仕事が回ってこんようになりまして。親父もそのころええ年になっとなって、あまり仕事に情熱持ってなかったんです。だから、おやじは引退しておれに継げ、て言うてきた。でも、まだまだ親父から学ばなあかんことはたくさんあったし、まだ自分には無理やってことになって、梶原電気工業は1年間で閉まって、やめた。それから、3か月は親父が退職手当として出してくれたから、その間に仕事探さなあかんってことになった。「この際、親離れしようや」と嫁と話したんですわ。そのときは、娘が3歳やった。それで、社宅のあるところを探すことにしました。

### 運送会社で労組を立ち上げ

そのとき、運送会社が伸びてる時期やったんですわ。社宅付きの運送会社を見つけて、電話した。そしたら、二日後には社宅に入れるように手配してくれた。社宅は1戸建てで家賃は7000円やった。仕事は6時30分から20時まで。この仕事は4年半やったんかな。その頃に、ギャンブルとか悪い遊びを覚えてしまったんやね。ギャンブルは、馬、競輪、他の賭博もやった。それで、借金を150万してしまったけど、これも親にまた助けてもらいました。

そうこうして2年後、会社で労働組合を立ち上げようという動きが出てきたんです。わしもそれにだいぶ関わってたんやけど、労働組合では共産系の全自運と同盟系の民自運があった。全自運が一番熱心に立ち上

げをサポートしてくれたね。全自運が倉庫を借りてくれて2ヶ月くらいこっそりと週2回勉強会を開いてました。でも、こういうのはなんで知らんけど漏れるんやな。漏れて、運転中にいきなり無線で社長室に呼び出されて、行ってみると社長とか専務などの幹部が全員いて、黙って封筒を渡された。中には札束が入っていて、これで収めてくれと言われたんやけど、できへんって言って、「みんなの前で社長がそのことを言うてくれ」と言うたんです。

そしたらその日のうちに全員での話し合いが持たれて、どうしても組合を作るんやったら同盟系統か、従業員組合にしてくれって社長に言われた。共産系の労働組合はすぐにストライキすることで有名で、中小企業でストライキされて実際倒産しているところも多々あると。やから、経営者はどうしても共産系はやめてくれと言ってきた。そこで、全社員で土日話し合った結果、組合は必要や、でもそれで会社が潰れてしまったら元も子もない、ということでまとまり、自分たちの従業員組合をつくることになったんです。そこで、おれが委員長に就任した。それで、2年間やったんかな。おれが委員長を辞めて顧問になったとき、急に次の委員長になる書記長の羽振りが良くなった。いきなりいい車に買い換えてたり、家を買ったり。まあ、会社を買収されてたんやな。そんなこんなで、社長に直に聞きました。そしたら、社長が「あいつが委員長になったら、ゆくゆくは組合を自然消滅させたいんや」と言うてきた。それで、1年間は我慢したんやけど、嫌気がさして結局会社を辞めました。

やめたときは親に泣きついてどうにか暮らしてた。仕事はほかの運送会社3社に行ったりしてた。そのころに子供が3人になった。そうこう3年間しているときに、またギャンブルに溺れた。その頃の娘の言葉で今もよく覚えてる言葉があるんよ。上の子が小学校で3回転校してるんやけど、そのときに「家が変わるたびに小さくなる。」って言われたこと。子供には苦労させたとお思います。

### 妻からの離婚話

20年間連れ添った嫁さんと別れる時が来た。これ

が人生の一番の転機やったなあ。嫁さんには「女性関係がなかったから今まで我慢できた」と言われた。そのとき、長女は高校出て、働き、18歳で結婚することになったんです。そうして、半年後嫁さんから「別れてくれ」って言われた。高校のときからの付き合いやったから、何で今さら？と思ったよ。急で、びっくりしたけど、分かってなかったんはおれだけやったんやなあ。親兄弟からは、「ようあの人辛抱したわ。遅すぎるくらいや」言われた。そこまで我慢させてたんやなあ。下の子供が、中3と中1やったけど、もう手がかからへんからって。それからは養育費として一人5万円の計10万円を毎月渡してた。

別れる前の昭和62年(41歳)からタクシー会社で働いてました。そこでも労働組合の幹部になってくれと頼まれたんやけど、前回のやつでこりごりやったから、ただの執行部をやった。タクシー会社にいたときは、夜は会社の仮眠室や車の中でほとんど寝てた。途中嫁と別れた後に寝る場所だけは確保ゆうて3年ほど同僚と6畳の家を借りてたりもしました。タクシーの仕事はきつかった。一昼夜勤務でね。平成5年までの7年働きその後半年ほど失業保険もらってたかな。それが48歳くらいで、それから少しして養育費の10万円を払わなくてよくなり、気が抜け働く気力が失せてしまったんです。一番下の坊主も高校卒業間近やったし。気が抜けてから2年ほど何もせんつぶら一としてた。そんなときは、母親にかなり無心して、苦勞かけたね……。家に行っても、親父にはていが悪から、陰で母親にゆうて、だいぶ支えてもらいました。

#### 築炉に出会い、働けなくなるまで

それからは税金のかからない仕事というか、日雇い仕事をまあ適当にちょこちょこやってました。で築炉の仕事を本格的にやりだしたんは54歳のとき。タクシーのとき借りてた家も、辞めたら実入りないし、ちょうど建て替えて追い出されて、築炉の仕事に出合う1年前から家がなくてカプセルホテルに泊まってたんです。その場所で顔見知りになった人に築炉の仕事を紹介してもらったわけやね。築炉の仕事は月によろあって2週間しかない。そのかわり単価はいいんです。

やけど仕事がきつい。主に製鉄の溶鉱炉や焼却場の炉などの補修や新築の現場仕事でね。30mくらい下に降りて。炉を止めて48時間冷やしてからやっても、それでも中の温度は40度から45度くらいあるんやないかな。やから、平均一時間仕事して一時間休憩といった感じやった。ひどい時には30分しかおれんかった。目の前に真っ赤な鉄が流れ落ちて行くし、超高温の現場で安全靴も半分くらい融けたりしたんやからな。築炉の仕事は会社の正社員が半分で、補助の人が残り半分で寄せ集め。で、そのほとんどは高齢で40歳以下なんかほとんどおらへん。他で勤められへん、仕事を選ばれへん人が来てたんですね。わしみたいに家なしやったり。そういう人やないと我慢して続けられんのです。そんなきつい仕事やから、高血圧はバツで、一度、神奈川で鼻血が止まらなくなって血圧を測ってみると、200/170くらいあって、病院に行けと言われた。けど、そんなときは自己申告やったから何とかなった。仕事始めた頃はなんともなかってんけど、その環境が自分には合わんかったんかなあ。60歳前の秋、とうとう、兵庫の現場行ったときに、会社の検診の高血圧のチェックで引っ掛かり仕事でけへんようになった。その時に、会社の親方から30万円もらいました。親方は人を集めて、上から1人頭1万7千円貰う。それでわしらには1人1万円ちょつとの給料や。やから1日に10人集めたら7万円や。まあ泊まるとこなんかいろいろ世話してくれるんやけどね。それで辞めるときには10万でも20万でも包んでくれるとは聞いてった。「働きたいのに、体の具合で辞めるゆうて悪かったなあ。我慢してくれ」てわしには30万。その30万に自分の20万の蓄え足して50万円がそのときの全財産でした。

#### 良かった仕事・きつかった仕事

いろいろやった仕事の中でやりがいがあったのは、親父と一緒にしていたときの海底ケーブルの仕事やね。感謝もされ、工事完成すると嬉しかった。いろんな場所に行くんやけど、五島列島なんかケーブルを引っ張ったときに地元の人から人足りんて、運動会出てくれ言われたりね。住民の人がとても喜んでくれたし、

仲良くなれたからね。やっぱりすごくやりがいがありました。

悪かったというか、一番しんどかったんは築炉じゃなくてね、タクシーやったです。タクシーの仕事は今までで一番きつかった。精神的につらいし、肉体的にも、座りっぱなしで特に腰に負担がかかる。しかも、完全歩合制でノルマ達成できんかったり、一日でも休むとボーナスも給料もカットされよったんですわ。どんなに一生懸命にやっていたとしてもお客がおらんかったら稼げん。きつかったですね。一人もんやバツイチでやってる人も多かった。

## 野宿になってからの生活

### 仕事も宿もなく

築炉を辞めてから1年くらいはカプセルホテルやら映画館で寝たり。でも働いてないし、50万円なんかすぐなくなる。泊まったりしてたら、2ヶ月ちょっとやね。去年5月くらいから、泊まるのもできんようになって、それでも公園で暮らすとかそんなんはできんようなプライドがあったんですわ。そんときの所持金が5万4千円。それでも暖かい間はなんとかなったんやけど、秋になって寒くなると外では寝れんようになり、9月くらいに駅で暮らすようになったんです。

それで、2ヶ月ほどして、夜回りで鍋谷さんたちに出会うたわけやね。そんときは所持金が1500円になっててどうしようかと思ってた。野宿になっても、新聞紙とかをひいて完全に体を横たえて寝るのが、恥ずかしかったんやね。でも駅の待合いで椅子に座って寝ているのでは、ぐっすり寝れへんし、体もやすまらん。これから寒くなってくるし、お金もないしでどうしようかと思っていた。そのころ夜回りに出会って、神さまはおる、と思った。それから結局すぐ紹介してもらった、敷金・礼金のいらないアパートに入れてもらって、そこで生活保護を受けることができたんです。

### これから

それから、生活保護でアパートで暮らしてたんやけど、さらに市営住宅にも応募したら、それがいきなり

当たった。あと、調べてもらったら、結構年金かけてたことが分かって、国民年金ならあと34ヶ月、厚生年金なら20ヶ月かけたら、年金がもらえるんです。さらに企業年金も6年かけてたので、それが出ると。そこから足りない分の年金の掛け金を払うことができると言われたんです。それで年金が満期になったら、保護じゃなく、年金で暮らせると思う。あとは今の状態が良くなったら、2、3時間でも軽作業があれば働きたいんです。うちの親父なんか85まで働いたからね、わしも頑張って働かなと思てる。シルバー人材センターの仕事とかでも、やりたいんやけど、順番待ちらしいですね。

今子どもは、一番下の娘と連絡は取ってて、なんかあつたら骨だけは捨てくれよとゆうとるんです。娘経由で、今年の4月に僕の母親が死んだことも知って、写真だけ、形見としてもらってます。嫁さんは長男と住んでるけど、全く連絡取ってない。そっとしておくんがあの人幸せやと思ってます。

## 「働きたいなあ。体は動かさなあかん」

聞き手：藤室 玲治 三輪 真子 宮地 陽介

- 松宮さんとは、夜回りのときに都賀川公園のベンチで過ごしているところであ会った。野宿しながら、毎日朝 5 時から仕事を探しに歩いて働いているということだった。「野宿生活は平気、こんなん何でもない」と言っていた松宮さんだったが、その後、住むところを探したいと言うようになった。行っていた仕事が無くなったからだった。

### 野宿になるまでの生活

#### 生まれと結婚、仕事

生まれは富山の山のほうや。今は名前とか合併で変わってしもうとるから、仮にわしらが帰ろう思うてもルート分からんし帰れんや。

きょうだいは 6 人で下から 2 番目。1939 年生まれで今年 69 歳になる。終戦は子どもの頃であんまり覚えてないけど、目の前でゴーン、ボン、ゴーン、ボン爆発したのは見たで。富山市内の空襲は凄かったけど、家は 4~5 km 離れとったからな。

家は農家やって、俺がおっても邪魔やから中学校卒業して北海道に行ったんや。2 年くらいおってそれから神戸に来て洋裁の仕事して、関西チップで 2~3 年働いて本職の電気屋になったんや。20 年くらいかな。

北海道へは隣近所のおっちゃんと菓の販売で行ったんや。越中富山の菓売りやんか。あれは販売のノルマがあって大変やった。札幌、別府、北見、小樽…色んなところ行っただ。言うてみればセールスやけどわしは口下手やから嫌ななってやめたんや。

それから神戸に同級生がおって来た。いっぺん来てみたのが運のつきやな。24 歳で住みこみで 5~6 年働いた。男のワイシャツの仕立てとか礼服の細かいひだとかの裁縫の仕事をしたわ。ひだを作るのが一番苦労したな。平野で 5 年くらいして、そのあと親父のところまで 1~2 年した。それから本山で家を借りて自分で始めたんや。独立みたいな感じやな。

その頃、結婚して子どもができた。奥さんとは仕事のつながりで出会ったんや。親父の連れと飲みに行っ

て、はじめ変なおばちゃんやな一思とった。それから何べんか会うようになったんや。27・28 歳くらいで子どもができて、家で洋裁の仕事ができなくなった。

洋裁の仕事の後関西チップで 2~3 年働いたな。松の木をチップにしてパルプにするんや。紙の材料になるんやな。そこは職人同士がべちゃくちゃ言いよって嫌ななったからやめた。

それから本職の電気屋や。会社は三宮にあって下請けしとって、配線渡したりとかほとんどが手元の仕事やな。ちょーおもしろかったでー。その当時は（昭和 40 年代）神戸市で、市営住宅が建設ラッシュやって、いろんなところ行っただ。やるのは市営住宅ばっか。21 時、22 時まで仕事して、2 時間くらい飲みに行く。そんでまた仕事に戻ってたなあ。寝えへん、寝えへん。忙しくて帰りたくなかったんや。家も別々やった。

市営住宅やから、1フロア 5~15 軒。それが 10 階建て以上が多かったんや。電気の配線前に壁をつける大工がおってようけんかしたわ。ビスならまだまわして取れるけど、ホッチキスでパチンと壁つけられたら困るんや。何べんやられたか。鉄パイプ振り回したよ。むこうはボンボンやっていくけど、うちらは配線用に木に穴をあけて線入れていくから 1 軒に半日以上かかる。わしは変なことするとカチンとくる方やからな。今でもそうや。ポートアイランド、須磨、名谷、妙法寺……そこらへんの市営住宅やったわ。

話しとったら懐かしくなってきたなあ。ほんまにおもしろいで。天井の厚さが薄くて 10cm も無いところがあつてな、入るすきまがなくてほんまは柱なんて切つたらいかんのやけど柱に溝作って埋め込んだりし

たわ。ようごまかしたもんや。配線は床を通したらいかんくて、天井を通すもんなんや。これは決まりやな。

だんだん仕事がなくなって、市営住宅とか公園のポールの建て替えみたいなバイトしたわ。縦横50cm50cm、深さ1mくらいに穴掘って水銀灯立てることもしたなあ。あれは全部手掘りなんや。狭いし石とか木の根っこがあって機械は入らへんからな。4人くらいの職人同士で誰が早くできるか競争した。わいわいやって楽しかったなあ。そんな時は飯がうまかった。仕事して飯食って飲んで、家帰ったらバタンキューやわ。

定年前に、神戸大学で水銀灯を立てる仕事をしたぞ。生協のプレハブの前あたりや。そのときは、図面がなくて配線を掘り当てるのに苦労したぞ。

#### 震災のときの様子

震災のときは、避難所で過ごしていた。家の近くに聾盲学校があって、そこにテントはろうかと思ったら、学校の中に入れてくれた。みんなが出ていったがわしは最後の最後までおったから、8月になって出て行けっていわれた。それから家を探しても見つかるのに1月くらいはかかった。ほんまやのう。地震があったんやのう。10年もたったらわすれてもうてるわ。それもいい思い出や。

#### 定年後家を出るまで

65歳で定年になってそれからは2~3年バイトした。バイトは税が取られんらしいからな。そしたらある時、今月6月いっぱい辞めてくれ言われたんや。しゃあないから辞めたんやけど、辞めた後に一気に税が取られたんや。言ってた話とちゃうやないか。その会社の経理のヤツがちゃんとやっとなかったんやな。4万弱くらいずつ2年にわたって年4、5回とられたで。均等にとってくんや。

ほんで奥さんには「使いこんだんちゃうか？」言われるやろ。ぐちゃぐちゃ言われるし、この年になってけんかするのも嫌やんか。奥さんは口が立つ方やし、わしは口下手やから殺される思うてわしから出て行こ思ったんや。楽んなろうってな。それに、孫がうちに

来て暴れるんやけど、奥さんは叱るんや。そんなも子どもやから暴れるやんか。奥さんが叱るのも嫌やってそこからルンペン生活始めたんや。

## 野宿になってからの生活

### 家を出てから

わし自身食べないかんから、たまたま飛び込みで人材派遣会社に行った。年齢的に8割9割ダメやと思ったけど、次の日からずっと仕事もらえたんや。うそ言うのは嫌やから68歳で言うたで。書類書かないかんからな。そしたら「おっさん髪白いでもっと上なんとちゃうか？」聞かれて。この白髪は子どもの頃からや。中学ん時には白かったでえ。それやからいじめられとったんやけどな。まあ、生きとるか分からんけど後3、4年たったら真っ白になるやろ。それが楽しみなんや。中途半端嫌いやから。

家を出た日から都賀川へ行って大石からダイエー辺りまで移動しとった。同じところにおられへんからな。そしたら昼間に警官にやられたんや。16時くらいかなあ。寝とったら若い警官が来てな、食って掛かったわ。どこにおっても俺の自由やんか。

野宿してたときの仕事は、土方をやとった。大阪行ったり、姫路行ったり、加古川行ったり……。解体の片づけとかやとった。それからコンクリの気泡を取るやつをやったりとかな。仕事をせんやつに限って、えらそうなんや。どこに行ってもそうや。それを言う本人がな、自ら動いてみて、文句言うんなら、わしらも納得すんねん。言うもんは言うだけ言って、どこに行ったんかと思ったら下にジュース買いに行とんのや。そういう仕事も年が明けてたらない。今の時期でちょっと出てきとんのかなあ。

わしは警備は嫌いやねん。ぼけ一と立とくだけやん。それに、警備しとつても止まらんやつもおるんや。道のどまんなかで止まれ止まれ言うとなのに止まらんから、怖いやんか。特に若いもんとか。だからな、あほやちゅうとんや。ありやあ、早う死ぬしかないわ。朝8時から晩の5時までぼけ一と立とくだけやと足が痛いんや。まだ体を動かさしとうほうがまし

や。また警備の方がお金も 500 円か 1,000 円くらい安い。親方が風呂行ってこいゆうて、仕方ないから行くんやけど、お金を出してくれんから、それが腹がたつねん。親方はがめついもん。みんな文句言うとうもん。文句言うくらいならみんなで親方に言えばええねん。

昔、一緒に仕事しとった運転手がビールを 3 本も飲んでから運転しとった。一緒に乗っとうだけでわしらにとぼちりくるから、いややったけど社長に言われとったから仕方なしに乗っとった。知らんふりしとったけどな。高速乗ってとばすから、それが怖い。現場行くまでになんべんもパーキング寄ってお酒を買ったから、イライラした。8 時までに行かなならんのに。向こう着いてからばたばたせならんかったから。それからはそいつと一緒に仕事するのがいややったから断ったんや。それから仕事がまわってこんようになった。

野宿してるときは 1 日 1 食くらい。仕事がある時は昼飯がついとうから。仕事があるときでも朝飯はくわん。食べとう時間がない。パンは 99 円ショップで買った。セブンイレブンでは 2 個で 100 円を買っ

とった。野宿生活はなんのつらいこともない。パンの 1 個も食べれて、寝るとこさえあれば大丈夫やった。石のかたいとこやと痛いけどな、それでも寝れるだけましや。夜はうるさい若者が騒いどうのがうるさかったけどな。警察に言われたときもわしは食ってかかっ

とった。一応文句を言うだけ言うて、どっか行っとうてまた時間たったら帰ってきた。夜は遅うに來て、朝は早うに出る。それがわしの主義やった。またあそこで寝ろと言われても、もう仕事がないかもしれんから無理やな。一番長いときでまるまる 1 ヶ月なかつた。3~5 月はそもそも仕事がない時期やったんやが、ひと月に 1 つや 2 ついれてくれてもええやんか。仕事がないときは何も食わずに水ぼっかり飲んどった。

### 更生センターでの生活

更生センターの話は野宿し始めた時は知らへんかつ

た。野々村さんが夜回りに來た時に、いっぺん行ってみいというから行ったんや。でもあない臭いところ、とてもじゃないがおれん。

たいがい二段ベッドの上でおったんやが、下の人がごちゃごちゃうるさいわけや。朝もパンが 1 個しかもらえんかった。

あそこには半年くらいおった。3 月ごろの冬の間、寒かったからなあ。最初に行った時、職員の人に、歳が歳だから上の更生センターの方に入れと言われたが、書類がいるからと言われたんや。わしはそういうのが面倒で嫌やから、断った。だが、正月だけは、3 日くらいそこで過ごさせてもろうた。普段はうっとうしいやつが多いんやが、そこはよかつた。団体生活だから、仕方ない面もあるやけどな、みんな行くところがなくて來ているんやから、助け合っとうて過ごすものやと思っ

とったんや。それを縄張り意識のよんとやかく言っ

てくるやつがおって、そういうのは嫌やった。また上におるもんもおるもん。偉そうやったわ。職員は優しくすぎて、みんながつけあがっとうておった。やっぱり言うべきときはきちんと注意せんとな。休みの日も朝早くから出ていかなならんかって、不便やった。5 時から 5 時半くらいの間に出ていかなあかんねん。休みの日くらいゆっくりしたかつた。雨の日も出ないといけないと思ひ込んでいて、時間を潰すのがなんぎや

### 夜回りの人との出会いから生活保護の申請へ

やった。誰も雨の日はいいなんて、教えてくれんかつたし。ぶどうパンか食パンを支給された。冬場だけはカップラーメンをようもろうたが、お湯がないから食べられへんから、職場のやつにあげた。その場で食べる分にはいいけどな、ご飯を食べて帰っとうて來てるのに夜にそんなもん食べられへん。好意でやっとうてもらっとうてことやから、文句は言うたらあかんけどな。

駐輪場におるのは時間つぶしや。変に思われるのが

嫌やから。夜回りの人と会うためにあそこに行っ  
たんや。前にいっぺん毛布を2枚もろうたんやが、そ  
の日使って、次の日仕事に持っていけんから、手すり  
に頑丈にまいて、「とるなよ、とったら殺すぞ」と書  
いていたが、それでもやっぱりとられたんや。それか  
らはもう悪いと思ってもらわんかったけどな。

わしはあんまり生活保護を受けたくなかったんや。  
自由がきかんし、仕事で稼いでも取り分のお金は減る  
ばかりやから、いややったんや。1日8,000円が月  
に15回もあつたら御の字や。今の国民年金よりずつ  
と多い。今の国民年金は介護保険などを払ったら、月  
に5万円しか手元に残らない。家賃を別にして5万く  
れたらなんとかやれるかもしれへんけどな、それじゃ  
絶対に無理やぞ。

6月くらいにはものすごく忙しく、日曜日仕事  
が入ってきた。最初の冬までは。朝の5時半くらいか  
ら出て行っていた。後の半年は行っても仕事がなく、  
はずればっかりやった。これじゃもうあかんなあと  
思った。

年変わったくらいから、やばいなあと思いはじめた  
んや。どっちみち世話になるんやつたらと思うて早い  
段階から申請したんや。それでもなかなか許可がおり  
んかった。銀行の口座に振り込んでほしかったんやが、  
無理やと断られたから、まあ暇やし月に2回くらいは  
ケースワーカーのお姉ちゃんの顔をみにくるわと言っ  
た。何か心配ことはないかと言われたけど、そんなも  
ん言うてもしかたないことやから言われへんって言っ  
たんや。

貸付金は1万円しか貸してもらえんかったから、ケ  
チやなあと思った。2万くらいぼーんとださんかあと  
も思ったんや。だからケースワーカーのお姉ちゃんに  
上のもんに言っとけとிட்டが……。1週間毎にもつ  
と行ったら増えたんかな。あんまり言うてもあかんけ  
どな。

### アパートに入って

ここに入ってから2ヶ月くらいや。今は奥さんや家  
族とは会いたいとは思わん。思うたらこんなところ  
におらへん。こないだ国民年金がきとつてむこうの住所

の上にここの住所がはとつたから、郵便局にいつ  
違うぞと言ってきた。

ここで暮らしてもなんもすることがないから、暇  
や。やることっていったら洗濯物くらいや。こないだ  
水道代の請求が2ヶ月分いっぺんにきてどないしよ  
うかなあと思ったぞ。電気やガスは大丈夫やが、水道は  
洗濯とかでかかるとつたのか……。これから川で洗おう  
かなと思う。きれいな水ではないけどな。

仕事をもらいに一応行っとうが、ないんや。正社員  
が仕事なくて遊んどくくらいやもん、バイトに仕事が  
まわってくるわけがない。行っても仕事はないが8時  
に追加があるから、待てよと言われて待っとうが結局  
仕事はまわってこん。働きたいなあ。体は動かさな  
あかん。

## 第4章 参加者の感想

岸 洋平 関 優里香 田中水彩 中村祥規  
鍋谷美子 野々村 耀 藤室玲治 村川奈津美  
山本かえ子

●写真 灘チャレンジで「空き缶集め」のゲームを行って、子どもに野宿の問題を伝えている学生たち。(2008年6月1日)



### 2年経って初めて

岸 洋平

個人的なことになるが、私が夜回りに参加し始めてもうすぐ3年は経とうとしている。ただ、どういうわけか自分でも分からないが、夜回りの中で野宿している人に話しかけたことがこれまでほとんどなかった（話を振られたりすると、何らかの答えを返すことくらいはしていたが）。夜回りの中では一人ひとりと話している時間は限られているから、自分が話に入ること、肝心の相談に乗ったり、最近の調子を聞くための時間がなくなってしまうのではないかと、活動は2週間に1度しかないのだからと遠慮（変な気遣い）をしている面は確かにあった。しかし、それ以上に自分から話をしたいという気持ちもなければ（実際にそれまで話をしなければなんとなく寂しいという気持ちも持ったことはなかった）、無意識のうちに野宿している人に対して、自分から一歩引いていたというのが本音であったのかもしれない。夜回りで大事なことは、ものを配ったり情報を与えるとすることよりも、話をすることだということには分かっていた。2年も関わっているのに、それがほとんどできない自分が行っても、せいぜい記録係くらいしか役に立たないと思っていた。

今年の最初の方の夜回りで、初めて自分から野宿

している人に話しかけた。それがいつでどんな内容だったかはもう覚えていないが、それにはすごく勇気が要ったのは覚えている。その野宿している人からの返答はまさに普通の人からのそれだった。どうという言葉が返されると予想していたかは今となっては忘れていたが、ただ話しかけるということに躊躇したり、勇気を出しているあたり、野宿している人と「普通の人」に線を引いていたということなのだろう。普段会うような人なら、何も考えずに話しかければいいし、2年経って初めて自分から話しかけるということは、まあまずない。それがなぜ、こと野宿している人に限ってはこれほどまでに違いが現れたのだろうか分からない。野宿している人は、世間ではこういう偏見を持っている人が多いけど実際はこうなんだよ、といった類の話は幾度と無く聞いてきて、分かっていたつもりにはなっていたが、結局は知識として知っただけで、感覚として理解はできていなかったということが今の自分なりの結論だ。最近夜回りに参加して間もない人が野宿している人に何か話やら質問やらしているのを見ていると、知識として偏見が解けるのは誰においても画一的に起こることだが、それを本当にものにできるのかは個人によってかなり差異があるものだと思うされる。自分の場合それに時間がかかる人だったのだろう。

それからは少し沈黙があると自分から話を振った

り、気になることがあれば聞くようにしてきた。そうして 2 年経って初めて野宿している人と精神的に向かい合って話していると、頭に浮かんできたことがある。夜回りにおいて大事なものは、話をするということもそうだが、もっと大切なのは会うことそのものではないのだろうか。今まで野宿している人が、なぜ夜回りの時間にちゃんとそこにいるのかを考えたとき、夜回りがあるってことを知ってるし、他に用事も無いみたいだからくらいにしか考えていなかった。そうではなくて、待ってくれているのだ。誰か知っている人と会うというのは尊いもので、私も最近勉強に追われて家と大学の往復だけの生活が続いて、誰とも連絡をとっていなかったが、気が滅入りそうになっていた。少し大げさに思えるかもしれないが、世界と自分が切り離された感覚すら覚えた。そんな中で少し外出した先で、知り合いにあったときの嬉しさはやはり何にも代えがたいものがあった。野宿している人も、人間ならばそれは全く同様のはずだ。ましてや不景気で仕事がないと言われている昨今、1 人で何もせずに過ごすしかない時間を疎ましく思っている人はたくさんいるはずだ。野宿している人においては、それは更に深刻だろう。そんな中で「自分に会いに来てくれる人」は心の支えになるはずだ。

私はこの一年のうちに何度か昼回りの方にも参加したが、そのときも同じことを感じた。やはり皆訪問を待ってくれていた。入院している間はすることも無く（テレビなども見ているとお金がかかったりする）、退院させられた後もどうなるか不安な中で、毎週忘れず話をしに来る人がいるということはやはり何も考えずに訪問していた私が思っている以上に、その当事者にとっては大きなことなのかもしれない。

月に 2 回だけでも、確実に誰かと会って話をすることが出来る。その一見基本的とも思える夜回りの重要性に 3 年近く経って初めて気付かされた一年だった。

もちろん、平然と違法に運用されている生活保護を受給できるように手助けをしたり、襲撃がこの前あったと申し入れをして、ちゃんと見ている人がい

るということを示すといったことも軽視できない。

(きし ようへい)

## 夜回りに参加して

関 優里香

私が夜回りに初めて参加したのは 2008 年の 4 月でした。きっかけは 6 月に毎年開催している、学生が作るお祭りの中で空き缶を集めて 1 キロを集めるゲームをすることです。もともと、野宿関係の活動をされている方たちが同様のお祭りをしたと聞き、子ども向けのゲームの部署担当の私は、同様のゲームをしようと考えました。発信をするこの私たちの祭りで、野宿をしている方の事を子どもたちやその親御さんにも知ってもらおうとしたのです。そのためにも、自分が野宿をしている方の事を知らなければ、とおもったのです。実際に祭りでは、子どもたち向けに紙芝居を作って、クイズも交えながら、話しながら楽しく少しでもためになるゲームにできたと思います。夜回りで、野宿される方が収入にしているアルミ缶の事をお聞きしたり、中学生が橋の下で野宿している方を襲撃したという話を聞き、ゲームで子どもたちの野宿している方への偏見が少しでもなくしたいという自分の動機が一層高まりました。

恥ずかしいことですが、私はずっと野宿をしている方を怖いと思っていました。親にも、東京の駅で見たホームレスを見ちゃだめよ、と言われてきました。でも、夜回りに行ってやっぱり思っていたほど怖くはないと思いました。みなさん、生きるのに一生懸命で、ちょっと世渡りが下手で、大事にしているものもあって……。一口に野宿者といっても、いろんな人がいて、一口に危険だ、怖いっていえるものではないのです。

こんな事を、祭りでみんなに知ってもらえていたら嬉しいです。

あの頃、怖くてろくに話しかけもできなかった私が今では、公園の知らないおじさんとも話せるようになりました。あの方も人間的に素敵な方だった…

…住んでいる場所や人間関係など、下手したら自尊心を傷つけてしまいはしないかと、怖いですがやっぱり人が人に興味を持って、その人の事を知ろうとするのは悪いことではないはずです。

今後のかかわり方としては、運転手でもできたらなあと思い、免許取得中です。野宿している方と、何回もあって関係性を築いていくのは、参加回数からして私には難しいですが、せめて活動が滞りなく続くように、まずは運転できるようになります。

(せき ゆりか)

## 夜回りに参加して

田中 水彩

私が野宿者支援に興味を持ったのはオーストラリア人の先生の一言がきっかけでした。

その先生曰く「日本の homeless people が通行人たちに施しを要求しないのは日本人が冷たいからじゃないのか」「住所がないと社会保障を受けられないのはおかしい。社会保障が一番必要なのは住所のない人だと思う」「彼らの数とか、どれくらいがアルコール依存症かとか鬱病かとか、そういうことはちゃんと調べられてないのか？（ちなみにいずれも政府レベルでは調べられていないそうです）」ということでした。

その時私は自分が野宿者について全く無知であることに初めて気づき、外国人である先生の方が日本の野宿者を取り巻く状況について意見を持っていることに衝撃を受けました。

そういうわけで夜回りに参加するようになりました。

野宿している人や夜回りを長くしている人と話して思ったことは、しっかりと自尊心を持っていて「他人の世話にはなりたくない」と思っている人が少なくないんだなァということ（もしかしたら「迷惑かけたくない」かもしれませんが）。

夜回りで配っているものを受け取らない人が沢山いることは今まで持っていた「支援」のイメージか

らして最初はとても意外でした。

しかしその一方で路上で衰弱死してしまう人がいることも知りました。

小学校以来、憲法のもと「人として最低限度の生活」は保障されていると教えられていたので——だから「ホームレスは好きでああして暮らしてる怠け者」という話を漠然と信じていたのですが——、多くの人が色々な理由（住所がない、家族がいる、など）をつけられて生活保護を受けられずにいる事実を知って、「もしかして憲法ってフィクションなのか……？」と、かなりがっかりしました。

自分が偏見を持っていたことにも気づきました。夜路上で寝るのは怖いだろうし、視線が苦痛に違いないし、好き好んでそんな暮らしを選ぶ人はいないという全く当たり前の感覚を今まで野宿している人にあてはめて考えようとしなかったのが我ながら不思議です。

私自身が将来職を失ってどうしようもなくなることだってあり得るのに（こう思えるのも野宿者が怠けもので野宿生活をしているのではなく、寧ろ必死で働いているのだとわかったからかもしれません）。

野宿をしている人たちと直接接することができたおかげでその種の想像力を持てたことと自分がともするとそれを手放してしまうことがあると認識できたのは私の中ではかなりの発見と進歩でした。

(たなか みさ)

## 不安定ということ

中村 祥規

夜回り準備会の活動に関わるようになって、ほぼ2年が経った。まだまだ分からないことだらけというのが正直な実感ではあるものの、継続して訪問している人については、その人の生活や人となり、少しずつ分かるようになってきた。同時に、野宿のひとに顔を覚えてもらうことも増えてきた。小さなことかもしれないが、自分の存在が相手に認知され

ているというのは、うれしいことだと思う。

だがその一方、この1年の間に会えなくなった人も少なくない。その中には、公園などからの立ち退きを迫られて、会えなくなってしまった人もいる。

このことは私にとって、思っていた以上にショックなできごとだった。行政や地域住民からの立ち退き要求を、私たちは「追い立て」などと呼んでいるが、「追い立て」がしばしばあることについては、すでに知識としては知っていたはずだった。また、活動に参加するようになってからも、話にはよく聞いていた。けれど、自分なりに人となりを知るようになった人が、ある日突然いなくなる、というのには、それまでとは違う喪失感があった。なにしろ、野宿状態にある人がそこからいなくなれば、まったく連絡のとりようもなくなるのだ。野宿生活がきわめて不安定なものであることは、頭では理解していたつもりだったが、それが目の前に現実として現れると、あらためて愕然とさせられた。

公園などで野宿している人は、公園を利用する他の人にとっては、目障りな存在かもしれない。だが、野宿している人にとって公園での生活は、その人がとりうる最善の生活であることがほとんどだというのが、夜回りに参加するようになっての私の実感だ。多くの人は、家を失うというきわめて限られた状況の中で、周囲に迷惑をかけないようにできるかぎりの配慮をしつつ、自分ができるかぎりの生活を築いている。それが、苦情などのわずかな力で容易に崩壊してしまうことに、何ともやるせない思いがした。

野宿している人の生活はしばしば、不安定な生活と形容される。昨年の今ごろの私はそれを、どちらかといえば「ふつうの生活に比べて」「収入や医療などの面で」不安定な生活という意味でとらえていたように思う。だが、不安定というのは、生活そのものが不安定であるというだけでなく、その不安定な中で営んできた生活がいつ維持できなくなるか分からない、という意味での不安定さも指すのだと思うようになった。野宿している人を「追い立て」る人はたぶん、そういう不安定さにはなかなか目が向かないのだろうと思う。じゃあ、それをどうすれば

いいのかといえば、なかなか考えがおよばないのだけど、ひとまず活動を通じて見えてくる課題については、目をそらさないようにしていきたい。

(なかむら よしり)

## やりたいからやる

鍋谷 美子

そこから旅立つことは とても力がいるよ  
波風たてられること きらう人ばかりで  
でも きみはそれでいいの  
樂がしたかっただけなの？  
僕をだましてもいいけど  
自分はもう だまさないで  
(「サヨナラ COLOR」 by SUPER BUTTER DOG)

感想がなかなか書けず今(2009年2月2日!)に至る。今回は報告書作り作業自体も難航した。メンバー各自の仕事や進路状況が大きく変わってきたこともある。よくも悪くも、私たちは動いて、もがいている。来年度にはこれまで一緒にやってきたメンバーが何人か物理的に夜回りに参加できなくなる。

さて、どうなるのかしら……と他人事のようにばかりは思ってもらえないのだけど、でも、私たちが変化していく状況も、やっぱりすごく社会の中で、社会の動きに連なりながら起こっている。

今日たまたま立ち読みした少女マンガ雑誌(「NANA」とか連載されてるメジャーなやつ)の中のある女子大生を主人公にしたマンガで、ふつーに就職難、や高学歴ワーキングプアとかが(用語としてやけど)、散りばめられてた。不況で先がみえないよ～みたいな。それをリアルタイムに読む人たちには、そういう厳しい状況が「ふつー」なのだ。気が付けばバブルもはじけて不況だった頃に学生時代を過ごしたロスジェネ世代(あたし)のように。

野宿の問題に関わっていると、そういう「ふつー」の状況が、じつは全然普通じゃなくて、おか

しいことの積み重ねで起こってきた人災のようなものだと実感する。だから、まず「ふつー」という認識を、「それ違うねん！ いっぱい作られてきたり、騙されてきてるねん！」と言って訴えていかないといけない。でもそのこと自体にもものすごくエネルギーがいる。自分の生活にキュウキュウとしている中で、世の中の大方の意見とたたかう、っていうのは、そりゃあしんどい。

2章にも少し書いたけど、夜回りをする／される人の境界が曖昧になってきていると感じる。「私たちもしんどい！」と大声で言いたい。べつに余裕がありまくるから、夜回りしているわけではないんだ。野宿の問題に関わることを通して、自分たちがもう少しラクに生きられる社会をつくりたい。そこがつながっているから夜回りを続けているんだと思う。

だから、状況がキツくなるうが、人が減ろうが、いるんなやり方で、できることをやるしかないし、やりたい。

やりたいからやる。そこからしか。

(ずっと「ふつう」ってなんやねん！と言い続けて、抗い続けてきた友人が昨年死んだ。はじめに引用したのは、その子がときどき公園で歌っていた歌。私もともと好きで、でもその子とはちょこちょこぶつかったりしてて、お、アンタもこれ好きなんや、とひそかに思っていた。私(たち)は世の中に落ちているありふれた、ふとしたことで、すぐにしゅんとなり、くじけてしまいそうになる。でも抗い続けるために勇気ももらう、そんな歌・ことばも生まれ続けている。私や、あなたへ。)

(なべたに よしこ)

## 我々と彼ら 野々村 耀

あるとき、僕は、隣人愛が嫌いだ、といったら、若い人に「？」という顔をされました。で、隣人愛という言葉は、元々「隣人を愛し、敵を憎め」とい

う教えだった。つまり、仲間は大切にし、そうでない者には、冷たくすべし、という思想だ、といいました。

内と外、敵と味方、彼らと我々……人を区分けし、分断するような考え方や、実践は社会に満ち溢れています。

この冬、年末年始にかけて、「年越し派遣村」が話題になり、マスコミも契約期間中なのに解雇された人々を何とかしなければならぬという言葉の繰り返しを繰り返しましたし、厚生省なども、突然施設への泊り込みを(短期間ですが)認めました。仕事と住むところを同時に、奪われた人々を放置していいのか、という訳です。そのこと自体には、賛成です。しかし、奇怪なことに今回の派遣切り以前に、仕事と住まいを無くした人のことは、無視されています。

例えば小泉改革と称して、リストラ旋風が吹き荒れたとき、仕事と住居を失った人々(それ以来野宿生活を強いられている人々)は、今回の救援対策の対象ではありません。私たちの神戸でも、震災でホームレスになった人々(その方たちは被災者と呼ばれてホームレスとは呼ばれなかった)は、避難所や仮設住宅や震災復興住宅が、用意されるなど、もちろん不十分な点は多々あったのですが、救援の対象とされたのですが、震災以前に野宿生活を強いられた人々は「元々のホームレス」といわれて、救援対象ではないとされました。

いろいろな理由づけをして、おなじ状況にある人を、分離し、選別する思想を正しいとするか、おぞましいとするか、あなたはどちらですか。

正社員と非正規の労働者……あの人たちは派遣だから首になっても仕方ないというような感覚が、つい最近まであった、或いは今もある。非正規雇用の労働者がものすごく増えたのは、確かにここ数年です。しかし、港や、建築現場などで働く日雇い労働者はこれまでも、明日の仕事、今日の仕事があるかどうかわからなかった。

実は昔から、大企業の社員は、臨時雇いの労働者や下請けの人をどれほど見下げてきたことか。

こんなことを考えていると、私たちの夜回りの元

になった、神戸 YWCA の震災救援センターの体験は貴重に思えます。公的な避難所に入りにくい、支援を受けにくい被災者を公園などに訪問していたとき、「あっちのテントには行かなくていいよ」といわれて、「どうして？」と聞くと「あの人は震災前からのホームレスだから」といわれたが、同じじゃないかと思って、訪問を続けた。これが YW の今の夜回りの始まりだったと聞いています（僕はそのとき別の救援センターにいたので、自分の体験ではありませんし、今の夜回りのメンバーは近年参加した人ばかりなので、このエピソードは、いわば伝承です）。

しかし、震災の後、沢山の避難所で「うちの避難所にはホームレスはいない（いれない）」ことを誇るような空気があったのは事実です。この人は助けるにあたいする、あの人はあたいしない、という線引きを出来る思想の怖さ。そんな線引きは出来ないと思ったところから夜回りが始まったということを大切にしたい。

ある地域で、野宿している人に数人の生徒が石を投げたことがあって、教育委員会や近隣の学校に話しに行くと、「権利の前に、義務があるから」というようなことを言われたことがあります。野宿している人は（何のことかわからないが）、義務を果たしていないのだから、余り権利を主張することは出来ないだろう、と思っているようなのです。しかし「命の大切さ」は教えている、と。どうして今の社会で野宿にまで追いやられるのかを突き詰めて考えない（知らない）で、「命」一般は尊いということだけでは、何も教えたことにならないといっても、そういうことには触れたくない様子でした。

アメリカでは「我々はひとつ」という掛け声が響いています。本当に線引きナシに、対等に生きられるのならすばらしい。しかし、実際には対立があるのに、それを覆い隠すために、「ひとつだ」というのなら、「実際にはひとつではない」といわねばならない。それに、ひとつである「我々」の外に「彼ら」がいるなら、望むべきひとつではない。あから

さまな、線引き（我々と彼ら）も拒み、偽りのひとつも拒んで、誰もが対等に生きられるようになるために、努力しよう。

（ののむら よう）

## 「失われた1年」？

藤室 玲治

### 生活保護申請に同行して

2007年7月から2008年7月の間（以下、この1年というこの期間を指す）を振り返ると、3人の方の生活保護申請に同行したというのが個人的には大きな経験であった。

それまでは、野々村さんについて行って、申請の場に同席させてもらったことがあっただけだった。それが初めて、当事者と私だけで申請同行するようになったのが、この1年間のことであった。もちろん、野々村さんには度々、電話で相談しながらのことであった。

そうなったのは、別に私がしっかりしていて同時に生活保護についての知識が豊富だったから組織的な分担として任された、ということでは全然ない。比較的、昼間自由に動けること、自動車を自由に使えること、その他、たまたまに申請に行く当事者との関係があったことなど、まあ、成り行きによってそうなったということだと思う。

3件の事例の中では、保護申請が受理されず、福祉事務所と押し問答というようなシーンはなかった。ただ「細かい」ことがいつも問題になる。カッコつきなのは、それは当事者にとっては実に困ったことになるから細かいとはとても言えないということだ。

例えば、布団のこと。野宿の状態から申請しているのだから、布団など持っていない。だから、早急に手配してもらわないと部屋で寝れないのだが、これが一筋縄ではいかない。以前、野々村さんと一緒に西区のアパートから保護申請同行したときには、区役所がその日の晩までに布団を手配してくれたように覚えている。しかし、私が手がけた内2件の

ケース（東灘区）では、そうはいかなかった。その日の晩までに布団を入れさせるということはできなかった。結局は、保護決定までの間の貸付金で、自分で購入するという事になった。この貸付金が、申請した日に貸してもらえない訳ではないのが、また困るのだ。

また役所は、実に気軽に「また明日の朝に来て下さい」というのだが、当事者にはその交通費がない。同行している私から貸すということも度々である。要は「野宿していた人」が申請して使うときに、きめ細かく対応できる制度にはなっていないのである。

そんな「細かい」ことは、支援団体が埋めればよい……ということでは筋が違うとも思う。要はきめ細かな対応をまずもっては運用として、進んでは権利として確立することが、私たちの仕事であろうから。その過程においては、確かに私たちが埋めるのではあるが、同時に「私たちが埋めなきゃならんのはおかしい」と思わなくてはならない。しかし、そう張り合うのは、またしんどいことだと感じたこの1年であった。

### 「失われた1年」？

2008年度というのは、夜回り準備会にとってひとつの曲がり角になる年度であった。昨年の「参加者の感想」に書いたが、2003年ないし2004年から活動を始めたメンバーが、本会の中心を担っているが、その半数近くが、様々な事情で2009年度からは今までのようには活動には関われないことが予期された。なによりまず、私自身が博士課程を修了した後、どうなることか分からないということで2008年度は始まった。

そうであればこそ、新たな世代の育成に力を注ぐことができればと思ったのではあるが、十分には果たせなかったところである。

この報告書に寄せられている感想文の執筆者数の減少（3号報告書17人→4号報告書9人）が、私たちの活動の広がりや弱まりを明瞭に示しているように思われる。そして、来年度はそれこそ、もっとしんどくなっていくことが予想される。こうした状況

に対して、組織的に対応することができなかったと考へ、私は2008年度を「失われた1年」と規定したことがある。

今、私として、無理にこの夜回り準備会が維持される必要もないのかも知れないと思う反面、若い人が野宿の問題に出会うことのできる、貴重な実践の場（関さんや田中さん、岸さんの感想文が示す様に）が、ここでひとつ失われるとしたら、それはあまりにももったいないとも思っている。

「失われた1年」という私の規定は、内部的にいくつもの批判にさらされた。ここで全面的に批判に回答することはできないが、いくつかの論点を受け入れるとしたら、確かにこの表現には、この1年で得られたものを無視してしまう嫌いがある。私が、私自身と周囲の状況の変化を柔軟に受け入れることができずに、イライラして出てきた規定じゃないかというような批判は、私の心理学的解剖としては正鵠を射ていよう。

得られたものを数え上げよう。無理なことは整理しよう。そうやって前に進むしかない。

（ふじむろ れいじ）

**あの日壊された心は「そんなにここにい  
はだめですか？」と叫んでいたのだろう**

**村川 奈津美**

「HOME」とはなんだろうかとたまたま考える。

一日の仕事を終え、おんぼろ原チャに乗ってちっこいアパートに帰る。大好きな唄をかけてメイクを落としたら、「私」が広がっていく。

でもこれが不思議なことに、例えば風邪なんかひいて1日ずっと家にいると、いやそうでなくとも、誰にも会わずに過ごしてしまった1日は、何をして、いつまで経っても、「私」が広がっていかないのである。

これは村川が単に寂しがりやなだけかもしれないが、「人間は社会的動物である」とはよく言ったもので、社会の中で、なんらかの交渉事を行ってこそ、

人間は人間らしい感覚を味わえる……と言うと言い過ぎなうえに語弊があるかもしれないが、「つながりが居場所」だと思う。そういう意味で、私にとっての「HOME」はもはや神戸である。この地に根付いた人間関係がある。朝が来れば、行くべき（行かなければならない）場所もあるし、するべき（しなければならぬ）こともある。大学、活動、仕事……「むう\*の現実」が広がる社会は、少なくとも今はここ神戸にしかない。神戸を離れることになったら、私は生きていけなくなるかもしれない。たとえ今より広くてきれいで暖かい寝床を用意されても、である。

だから、「追い立て」や「排除」というものに遭遇すると、怒りとか、悲しみとか、それを乗り越えて、どうにも言葉では言い表せない気持ちになる。心が崩れそうになる。どこかから「全力で拒絶しろ！」という命令が下されたかのように、心が勝手に暴走し出しているから、私の頭のほうは、それを抑えることに必死だったりする。それが抑えきれなくなったのが、長居公園の代執行の時だったのだろう。「理不尽に居場所を奪われる」ということに、言いようのない恐怖心を抱いているのだろう。私自身、こうして立っていられるのは「HOME」があるからだから。

「日本の社会はいつからこんなに冷たくなったのだろう」ともたまたま考える。

公園などの公共の場所に住むことに関してはいろんな意見があると思う。でも、「あそこにホームレスがいるからなんとかしてくれ」なんてことを言うひとには「あんたらみたいなひとがいるから、『HOME』less なひとがどんどん再生産されていくんだよ」って言いたくなる。誰にだってその地に根付いてきた暮らしや人間関係があるのだから、「野宿状態でなくなれば良い」とか、「自分の前からいなくなれば良い」とか、そう簡単に言えるものではないはずだ。もちろん、こんなに社会に人間がたくさんいたら、それぞれの暮らしが相容れないという状態はどうしても起こってしまうと思うから、そこは調整が必要などころではあるとは思いますが、一方的

に圧力をかけて排除とかは、良くないと思う。どうしてその地に根付かざるを得なかったのか、そういう想像力を働かせることが必要だと思う。なのに一方的に排除するから、みんな「HOME」をなくしていくんだよね。

最近、自分のやりたいことはソーシャルワークなんだなってつくづく思う。「ソーシャルワークとは、社会福祉援助のことであり、人々が生活していくうえでの問題を解決・緩和することで、利用者の質の高い生活を支援することを言います。支援を行ううえでも既存の社会サービスで足りないものがあれば、制度も含めた社会資源の開発も行います」って、これコピペなんですけど（笑）。コピペはさらに続く。

「ソーシャルワークの要はずばり、面接です。面接を通して利用者の抱えている問題の核心、利用者の求めているものや必要としているものを明らかにします。これらが明らかになることで『誰が、どのような方法で、どのような解決をしていくのか』といったソーシャルワークを実践していきます」

なんか、ひととして人と接するうえで当然のことが書いてあるような気もするんですが、これを読む限り、「問題」は私たちが規定するものではないのと思う。「こうあるべき」は、私たちが一方的に押し付けるものではないのだろう。私たちが最初にするべきことは、耳を傾けること、相手に寄り添うこと、だと思う。そして、相手に最も良い選択肢を提示……まではできなくとも、最良の選択ができるように、できる限りのことをする。

でも、「社会がこうあるべき」ということはいくらでも申し入れていくべきだと思う。だから、こういう報告書とか作ってみたいりする。

（むらかわ なつみ）

## 語ること、しんどさについて、雑感

山本 かえ子

語りの解釈は相手に委ねられている、という恐怖  
私が今回話を聞かせてもらった小河さんは、警察

に容疑をかけられ、冤罪で4年間も拘束状態のような環境に置かれた人だった。「こんな劇的な人生もあるのか!」と、驚きの連続だった(詳しくは、聞き取りの内容を参照)。

その後、テープ起こしをしてもらった原稿を持って行って読んでもらい、後日訂正箇所を聞いた。そのとき、小河さんは以下のように話していた。

この原稿を友人に読んでもらったら、「これだと、あんたがひどい目に遭ったことばかりで、ホームレスがどんなにしんどいんか、伝わらへんで。一般向けには『ホームレスってこんなにしんどいんや、かわいそうなんや』ということを書かないと、『ええ格好しいや』と思われるだけちゃうか」、といったようなことを言われたわ。

このことを聞いて、「語れども語れども、その受け止め方はあくまで相手に委ねられてしまうのだ」という、一種の恐怖を感じた。自分がどれほど思いを訴えていったとしても、相手にそれが伝わるちょっとした糸口がないと、伝わらない。小河さんの語りは、私たちの報告書に載るということで、一般に“「ホームレス」の語り”だという枠から見られざるを得なくなってしまう。

夜回りの活動はホームレス状態の人々のところをまわる活動だが、つきつめていけば人間たちの生き方について問い直す活動につながっていく。私は一方で歴史の研究をしているが、歴史の研究活動だっそうだ。ただ、「人間たちの生き方を問い直す」とすると、焦点がぼやけてしまう。「ホームレス」のことを伝えていくことで、排除されてしまいがちな人々と排除する人々が共に生きやすくなる社会をつくっていくことに努めたいと思う一方で、小河さんや他の人の語りに「ホームレス」というフィルターをかぶせてしまうことへのためらいも感じる。

### しんどさ、について

しんどさを口に出し、伝えるということ。

しんどさを受け止めること。

私はその両方とも、うまくできずにいることが多い。

しんどさを相手に伝えるとき、いろいろ考えてしまう。こんなしんどさなんて、実はちっぽけなものと言うに足りないものなのではないか。何よりも、しんどさを口に出すことは弱みをさらけ出してしまふことであり、恥ずかしい、見せたくないという気持ちもある。

しんどさを負わされている当の相手に向き合って「しんどい」と言うのは、なおのこと勇気がいる。関係性が壊れてしまい、もう対話の糸口も見出せなくなってしまうかもしれない。隠しておくほうが、自分にとっても相手にとっても楽であると考えがちだ。

「しんどい」と言うとき、自分はより弱い立場に立ってしまう。強がりな私は、未だにしんどさをうまく語れずにいる。しかし、語らないと相手に伝わらないし、「自分と相手の間」という、より客観的なところに置くことで、少しでも自分のしんどさを和らげようとすることもできない。だから、少しずつでも、口に出せるようになりたいと思う。

逆に、しんどさを語っている相手を傷つけてしまったことがある。自分のしんどさを語る相手に対して、ともに考えるつもりで、「あなたのしんどさはこれが原因ではないか」と突き止め、楽にさせようとした。そうしたら、逆に、私の指摘が相手を追いつめ、さらにしんどくさせてしまったのである。

繰り返しになるが、「しんどい」と言うとき、人はより弱い立場に立ってしまう。そして、「しんどさ」を語っても、その解釈は、傷つけられた相手など受け止める側に委ねられてしまうのである。その恐怖にさらされながら、人は「しんどさ」を語っている。まずは相手のしんどさを受けとめること、それによって自分もしんどくなる時もあるけれど、それを避けるため「解決」を装って、自分なりに解釈を加えたり原因を突き止めたりするのを抑えることも、ときには必要だということ、肝に銘じたい。

夜回りでまわっているとき、回っている側はほと

んど自分のことを語らない。訪問したときに出会った相手には、より「しんどいこと」を聞き出そうとしがちになる。そのしんどさに対して、「こうしたら」と、解決策らしきものをすぐに提示しがちになる。「しんどさを語るのは、より弱い立場に立つことになり、それ自体がしんどいことなんだ」ということを心に置きながら、夜回りや歴史研究など、いろいろなことに取り組んでいきたいと思う。

(やまもと かえこ)

公務員の皆さん!! 追い出しは違法です

ご承知のように、公務員は法を守る義務があります。  
 「天皇または摂政および國務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員はこの憲法を尊重し職を遂行する義務を負ふ。」憲法 98 条  
 その憲法には  
 「日本国が締結した条約および確立された国際法規は、これを誠実に遵守することを必要とする。」とあります。憲法 98 条②  
 日本は国際人権規約(経済的・社会的および文化的権利に関する国際規約)という条約を締結しています。その 11 条に「この規約の締約国は、自己およびその家族のための適切な食料、衣服、および住居を含む適切な生活水準についての全てのものの権利を認め」とあり、社会権委員会はこの規約が正しく解釈されるために、一般的意見を公表しています。一般的意見 4 には「適切な住居」とは何か、詳しく書いてあり、  
 中でも「住みつつける権利」＝「追い出されない権利」が重視されています。  
 また、1998 年 8 月 10 日、国連人権委員会は「強制追い立てに関する決議」を日本を含む 53 カ国の代表者によって満場一致で採択しました。これは、住んでいる人の合法性に関係なく、つまり権利がない占有者、テナントと生活している人、路上生活する人にも適用されます。  
 1997 年には 一般的意見 7 が採択されました。いずれの一般的意見も決議も「全ての人々が、強制立退き、嫌がらせ、その他の脅しに対して、法的保護を保障されるべきだ」という見解を示し、追い立てに強く反対しています。  
 強制と言うのは「アルド一ザーで家を壊すような物理的な強制」、だけでなく、嫌がらせや、その他のおどしも含んでいることに注意してください。  
 警察も市の土地に関しては、市の依頼がなければ追い立てることはできませんし、手続きが必要です。  
 私たちはこれまでに、神戸市と以下のような話し合いをしました。  
 1 一方的に追い出したり、生活に必要な物資を撤去したりしない。基本的に追い立てはしない。  
 2 野宿している者の人権、生きる権利、人間の尊厳を大切にし、差別をしない。  
 3 やむを得ず、移動を求める必要がある場合は、以下の手続きをとること。  
 ア 移動を求める理由を本人に説明すること。  
 イ これは、追い出しではなく、移動を求めることだから、次に住むところを用意し、本人が理解し納得した上で、本人が移動すること。(本人が希望すれば手伝っても良い)  
 ウ 生活用品は本人が納得しなければ、撤去や廃棄はできない。  
 エ 移動をする必要性を本人が納得できるために、少なくとも一ヶ月前までに(市は2週間前といっている)、文書と口頭で、移動して欲しいことを伝え、説明すること。  
 オ 文書は判りやすいところに張ること。  
 カ 文書の内容は (1) 移動を求める理由 (2) 移動先 (3) 移動の期限 (4) 文書を張った日付 (5) 部署と責任者名と担当者名 (6) 連絡先 保健福祉局などと連携して、本人の状態に応じて、移動先や医療、生活保護や仕事などについてきめ細かく対応できる体制を整えて相談に応じること。  
 ですから、出て行けという人がきたら、これを黙んでもらって、以下に記入してもらってください。(記入しない人は、ただのいたずらからかもしれません)  
 1 上に書いてある文書がなければ、準備してください。  
 (1) 移動を求める理由  
 (2) 移動先  
 (3) 移動の期限  
 (4) 日付  
 (5) 部署と責任者名と担当者名 (部署 ) 担当者名  
 (6) 連絡先 (電話 )

お問い合わせは 神戸YWCA 231-6201 寺内 または 261-3983 野々村まで

今住んでいる場所から出て行けといわれたら !!

私たちはこれまで何度も、追い立てに関して、神戸市と話し合いをしました。  
 行くところがないのに、強制的に追い出すことは、よほどの手続きをとらなければできません。公團や港や川のそばなど、公の場所は神戸市や兵庫県が管理している場所ですから、市や県が許さなければ警察でも追い出すことはできません。

神戸市と話し合ってきたことは、以下のようなことです。

- 1 一方的に追い出したり、生活に必要な物資を撤去したりしない。基本的に追い立てはしない。
- 2 野宿している者の人権、生きる権利、人間の尊厳を大切にし、差別をしない。
- 3 やむを得ず、移動を求める必要がある場合は、以下の手続きをとること。  
 ア 移動を求める理由を本人に説明すること。  
 イ これは、追い出しではなく、移動を求めることだから、次に住むところを用意し、本人が理解し納得した上で、本人が移動すること。(本人が希望すれば手伝っても良い)  
 ウ 生活用品は本人が納得しなければ、撤去や廃棄はできない。
- エ 移動をする必要性を本人が納得できるために、少なくとも一ヶ月前までに(市は2週間前といっている)、文書と口頭で、移動して欲しいことを伝え、説明すること。  
 オ 文書は判りやすいところに張ること。  
 カ 文書の内容は (1) 移動を求める理由 (2) 移動先 (3) 移動の期限 (4) 文書を張った日付 (5) 部署と責任者名と担当者名 (6) 連絡先 保健福祉局などと連携して、本人の状態に応じて、移動先や医療、生活保護や仕事などについてきめ細かく対応できる体制を整えて相談に応じること。

ですから、出て行けという人がきたら、これを黙んでもらって、以下に記入してもらってください。(記入しない人は、ただのいたずらからかもしれません)

- 1 上に書いてある文書がなければ、準備してください。  
 (1) 移動を求める理由  
 (2) 移動先  
 (3) 移動の期限  
 (4) 日付  
 (5) 部署と責任者名と担当者名 (部署 ) 担当者名  
 (6) 連絡先 (電話 )

出て行けといわれたら、記入してもらったら、下記に知らせてください  
 神戸YWCA 夜回りグループ 電話 231-6201 寺内 または 261-3983 野々村

## ご協力ありがとうございました

### 神戸YWCA 夜回り準備会 会計報告 (期間：2007年4月1日～2008年3月31日)

【収入】			【支出】		
項目	金額	備考	項目	金額	備考
カンパ	187,896	44件	プログラム費	107,516	灘チャレンジ・年末年始炊き出し等
助成金	530,000	兵庫県社会福祉協議会ボランティア活動助成金・財団法人大和証券福祉財団ボランティア活動助成・兵庫県共同募金会平成19年度NHK歳末たすけあい義援金	交通費	121,773	駐車料・ガソリン代
事業収入	45,000	講演録売上	通信費	9,747	活動報告書発送・振込手数料
その他	87,200	神戸大学ボランティア講座謝金・神戸市シルバーカレッジ授業実施謝金・灘チャレンジ売上	印刷製本費	308,260	活動報告書作成・チラシ印刷費等
合計	850,096		消耗品費	85,019	年末下着奇贈・蚊取り線香・カイロ・菓等
			備品費	95,650	プリンター・住宅地図
			書籍費	4,500	
			管理費	117,631	分室維持管理・人件費等
			合計	850,096	

2007年度(2007年4月1日から2008年3月31日まで)、及び2008年4月1日から2009年1月31日の間に、以下の方々より、夜回り準備会のために活動資金や物品などの寄付をいただきました。記して感謝いたします。万が一、お名前がもれています場合はご一報いただけましたら幸いです。

2007年度(2007年4月1日から2008年3月31日まで)

鈴木誠也 岡本建志 篠崎八恵子 日本YWCA中央委員会 津田昌夫 栗山次朗 鶴崎祥子 村田由夫  
野々村耀 西島明子 島本健二 清水公明 田中晃 林祐介 片山恵 北のコタン宮田洋子 大竹胖 牧野哲  
西山秀樹 田花安子 平木貴美子 岩崎滋 福田信介 二関実枝 川辺比呂子 寺内真子 田口隆弘  
鍋谷美子 吉田英三 小泉浩 岡田有生 尾藤光一 (以上順不同・敬称略)

2008年度(2008年4月1日から2009年1月31日まで)

西島明子 吉田英三 柏木妙子 大久保生子 高田康夫 天野永治 津田昌夫 武田多美 鶴崎祥子  
斎藤順子 林祐介 清水純子 園部りえ子 清水公明 中山茂 野々村耀 中村祥規 村川奈津美 松田公平  
井上みち子 森崎武雄 下田隆清・鄭秀珠・由楽 飯濱玲子 長澤毅 岡本祥浩 島本健二 鈴木孝子 中田  
法身如道有馬吉徳 斉木あきら 車田博子 小泉浩 (以上順不同・敬称略)

### 参加者募集

神戸YWCA夜回り準備会では、活動に参加する方を募集しております。会の目的にご賛同いただけるのならば、どなたでもご参加いただけます。2008年度も以下の日程で活動を実施しております。なお参加される際には、事前にその旨を神戸YWCAの担当(山本)までご一報下さい。

- 夜回り：毎月第2・第4土曜日 神戸YWCA分室(中央区坂口通5-2-16)に18:00集合  
※初参加の方へは活動のあらましを説明するオリエンテーションを行いますので、17:00に集合してください。
- 病院訪問：毎週1回、週により月曜日から木曜日に実施 昼から  
※参加日時・集合場所については事前にお問い合わせ下さい。

【お問い合わせ】 〒651-0093 神戸市中央区二宮町1-12-10 担当・山本

TEL：078-231-6201 FAX：078-231-6692 E-mail：office@kobe.ywca.or.jp

編集 今西裕哉・五明泰作・中村祥規・銅谷美子・野々村耀・藤室玲治・三輪真子・宮地陽介・村川奈津美・山本かえ子  
発行 神戸YWCA夜回り準備会

---

【神戸YWCA本館】 〒651-0093 神戸市中央区二宮町1-12-10 TEL：078-231-6201 FAX：078-231-6692 (担当・山本)

【神戸YWCA分室】 〒651-0063 神戸市中央区坂口通5-2-15 神戸YWCA分室 TEL & FAX：078-221-5111

【E-mail】 office@kobe.ywca.or.jp 【URL】 <http://www.kobe.ywca.or.jp/index.html>

【郵便振替】 01100-0-10298 名義：神戸基督教女子青年会

【銀行口座】 三井住友銀行 三宮支店 (普)1015232 名義：(財)神戸YWCA

※夜回り準備会へのご寄付は、郵便振替用紙にその旨明記するか、上記連絡先にご一報ください。

---